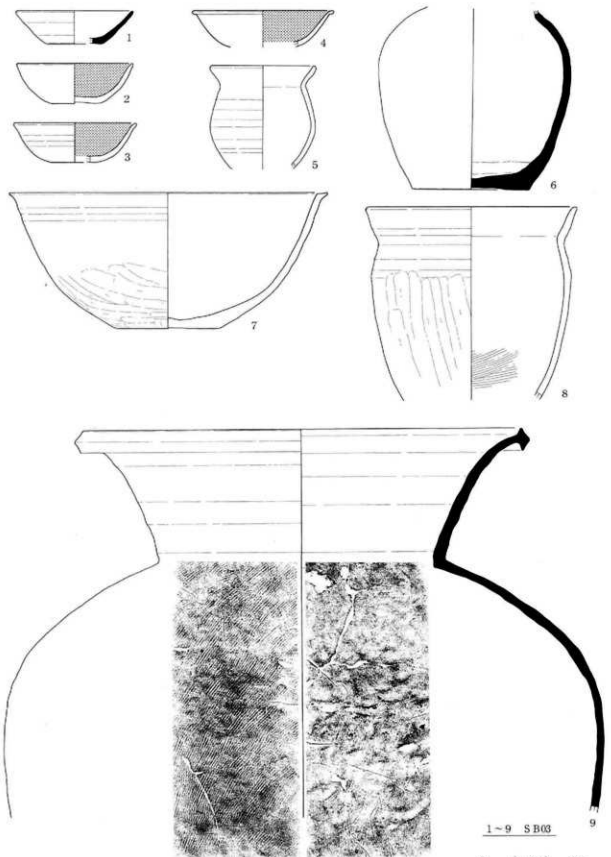


図88 Ⅳ区1次面出土土器実測図② (S = 1 / 4)

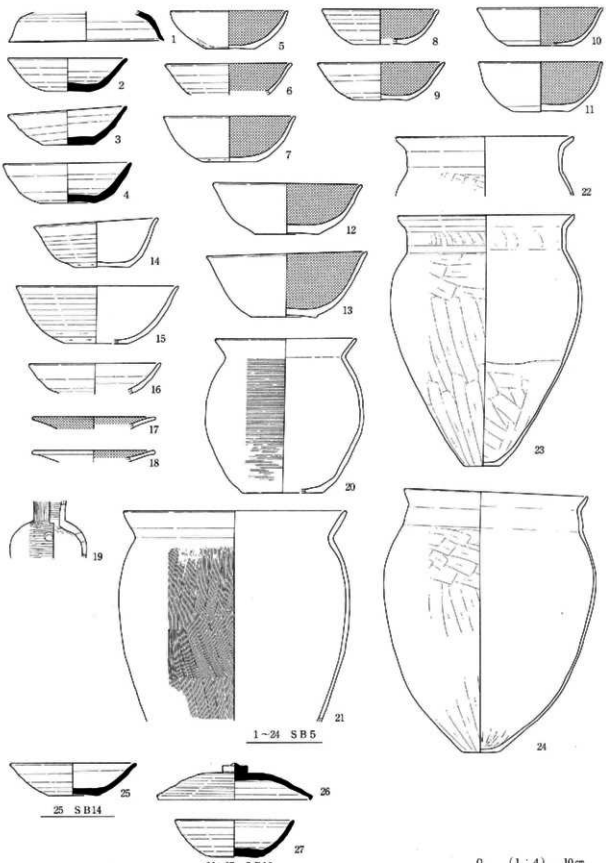


図89 Ⅳ区1次面出土土器実測図③（S＝1／4）

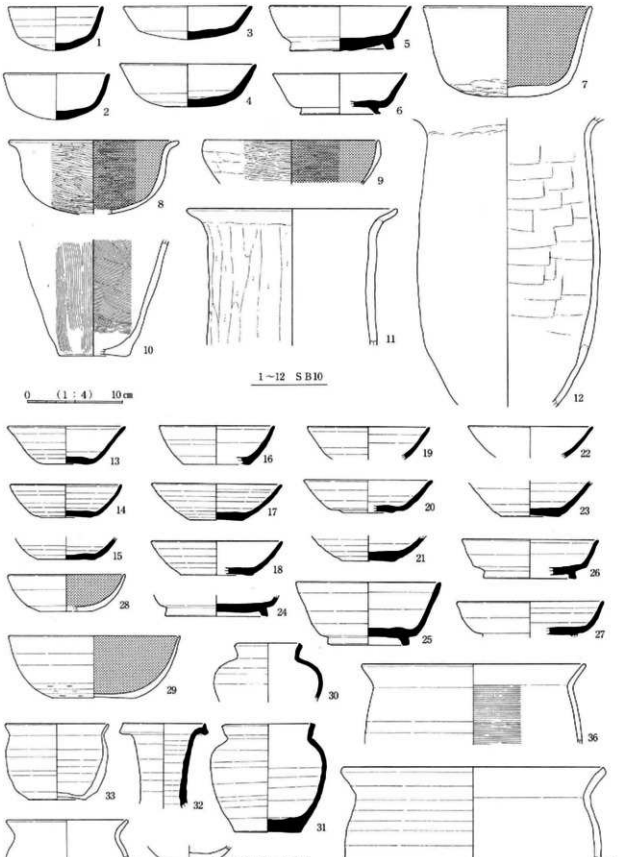


図90 Ⅳ区1次面出土土器実測図④ (S = 1 / 4)

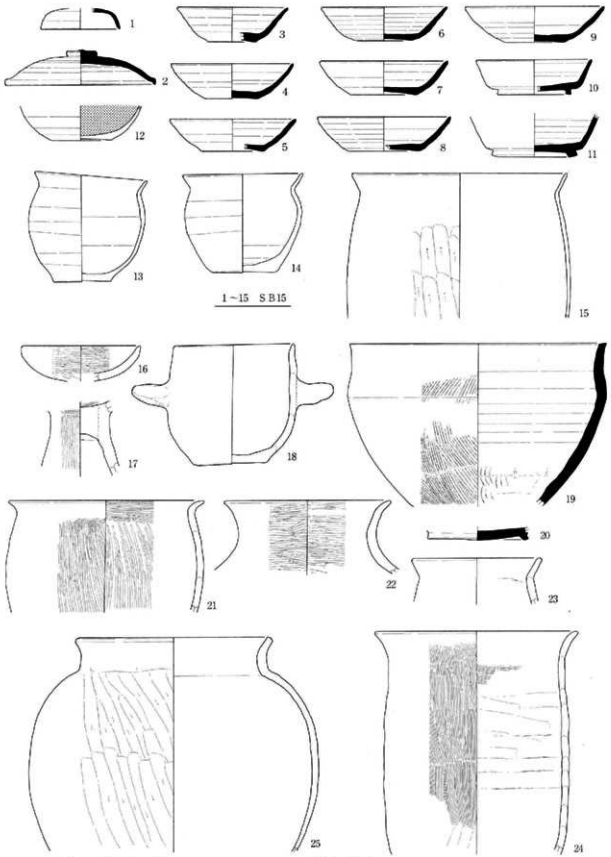


図91 Ⅳ区1次面出土土器実測図⑤ (S = 1 / 4)

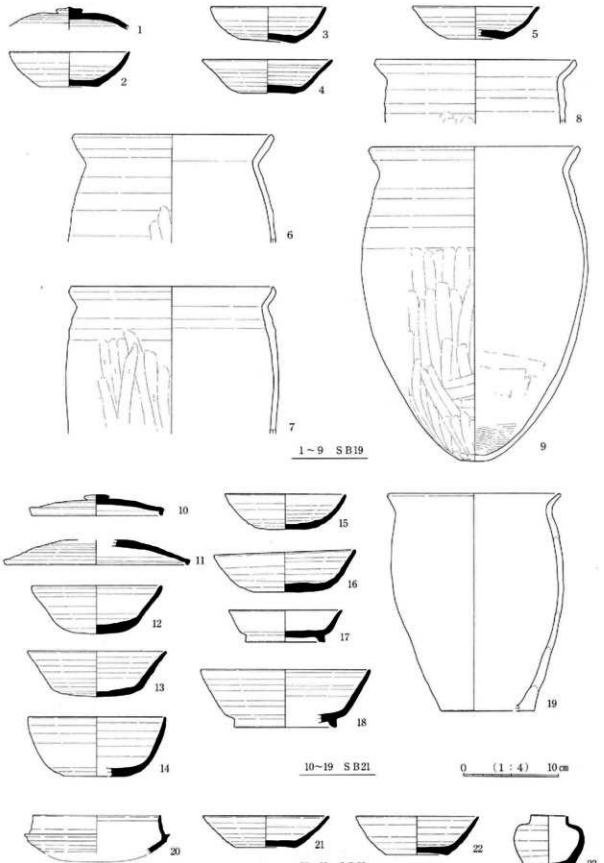


図92　Ⅳ区1次面出土土器実測図⑥（S＝1／4）

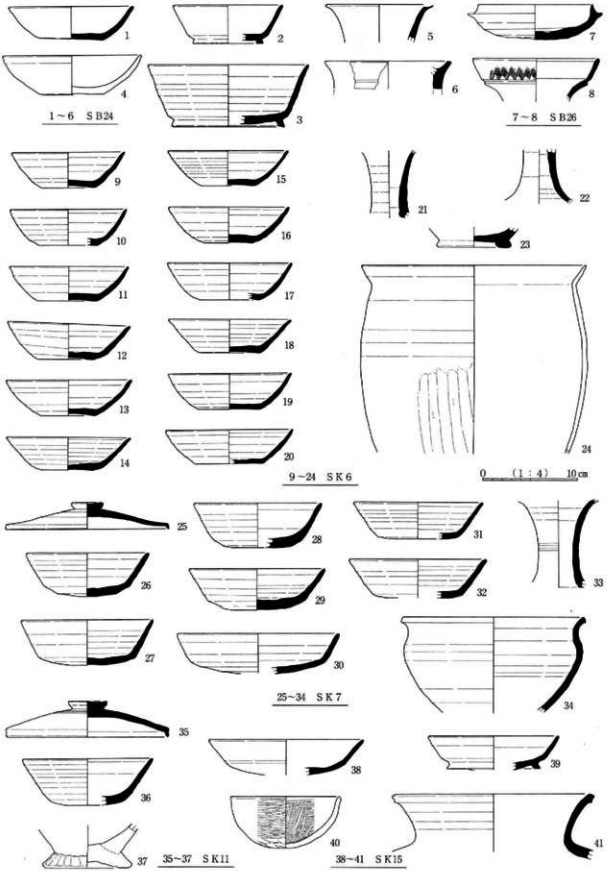


図93 Ⅳ区1次面出土土器実測図⑦ (S = 1 / 4)

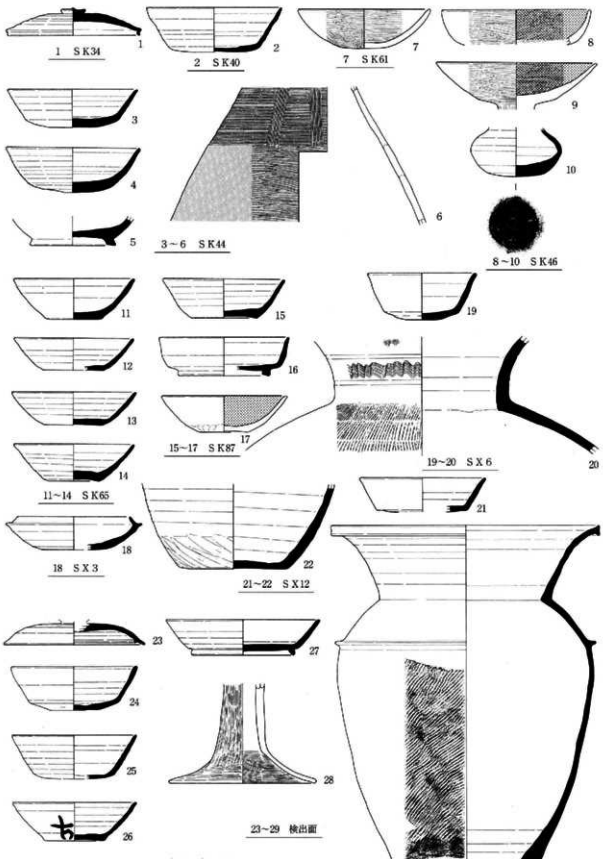


図94 Ⅳ区1次面出土土器実測図⑧ (S=1/4)

2　2次面の調査

2次面は弥生時代後期～古墳時代前期に該当し、1次面で遺構プランが不確定であった古墳時代後期～中世の遺構の調査も実施している。

古墳時代前期は西端部で円形周溝墓が2基確認された。それぞれ周溝は独立し、並列して位置する。さらに、周溝墓西側の壁中より遺物が出土し、調査区外にも周溝墓が存在して墓域を形成した可能性が予測される。隣接する北陸新幹線地点では弥生時代後期の円形周溝墓群が千曲川沿いの南側より造墓が開始され、順次北側へ墓域を拡張していったことが明らかにされている。本調査区にて検出された2基の円形周溝墓はともに北陸新幹線地点の周溝墓群のさらに北側に当たり、より新しい時期の周溝墓として、一連の墓域を形成するものとの位置づけが可能である。

写真66　Ⅳ区2次面全景（東から）

写真67　Ⅳ区2次面全景（西から）

弥生時代後期は土坑・溝が中心となり、竪穴住居の確認はない。検出遺構数も少なく、Ⅴ区以西の状況と大きく異なる。後述するように、弥生時代後期集落の東限がⅤ区に求められることより、居住域外に該当すると考えられる。

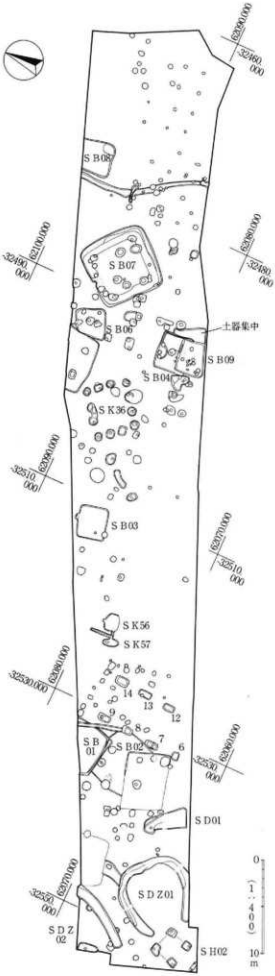


図95　Ⅳ区2次面遺構分布図（S＝1/400）

調査面	遺構名	時代	重複関係		床面（底面）	付属施設	特記事項	備考	遺構図	土器図	写真
			先	後	柱穴				版番号	版番号	番号
Ⅳ 2次面	調査区西壁内	弥生後～古墳前					調査区西壁中（2次確認面のレベル）に図示した土器群が一箇所より集中して出土した。遺構種別は把握できないが、土器群は一括資料である。		96 ←部分	110	69
Ⅳ 2次面	SDZ 1	古墳前期				開溝内土器埋納	埋葬施設の検出なし		96 105	108	70 71 90
Ⅳ 2次面	SDZ 2	弥生後～古墳前					埋葬施設の検出なし	西壁一括出土土器群は古墳に伴う可能性あり	96	108	90 91
Ⅳ 2次面	SB02	奈良		SB01	硬化面	カマド残欠（北西壁）			97 98	106	88
					なし						
Ⅳ 2次面	SD01	弥生後期			脆弱 平坦			浅い不整形土坑 腹土は昭明色粘質土単層	97	107	
Ⅳ 1-2面	SB14	平安	SB02		貼床	カマド（東壁）		2次面でカマド（大床）確認	97	107	
					なし						
Ⅳ 2次面	SB01	奈良～平安	SB02		硬化面				98		
					なし						
Ⅳ 2次面	SD03	奈良～平安	SB01	SK08					98	107	
Ⅳ 2次面	SK13	中世					SK 6～9・12～14で面立柱建物を構成するか		98	107	89
Ⅳ 2次面	SK56	弥生後期						SK56・57間にトレンチを設定し、それぞれ別遺構であることを確認	80 99	107	68
Ⅳ 2次面	SK57	弥生後期							99	108	
Ⅳ 2次面	SB03	奈良		SK22	貼床	カマド残欠（北壁）			100	106	84
					なし						
Ⅳ 2次面	SB04	古墳～奈良		SB09	貼床（部分的）	カマド残欠（西壁）			101		87
					なし						
Ⅳ 2次面	SB09	奈良	SB04	1面SB19	硬化面	カマド残欠（北壁）			101	106	
					明確な柱穴なし						
Ⅳ 2次面	SB09東側 土器集中	弥生後期		SB04 SB09			掘り込み等は不明瞭で確定されなかった		101 102	109	
Ⅳ 2次面	SK36	弥生後期					周辺の土坑群とともに規則的に配置されるが、建物節か否かは不明		101	107	
Ⅳ 2次面	SK39	古墳後以降					図示した三足土器1点のみ出土		101	107	
Ⅳ 2次面	SKY 1	弥生後期		SB07			SB07重複によって破壊された遺構残骸か SB07下に同様の弥生土坑が4基あり		102		
Ⅳ 2次面	SB06	奈良か			脆弱		北壁に地土		102		85
					なし						
Ⅳ 2次面	SB08	平安			脆弱			住居跡の可能性低い	103	106	
					なし						

表12　Ⅳ区２次面主要検出遺構一覧表

写真68　ＳＫ56遺物出土状況（１次面検出状況）

写真69　調査区西壁土器出土状況

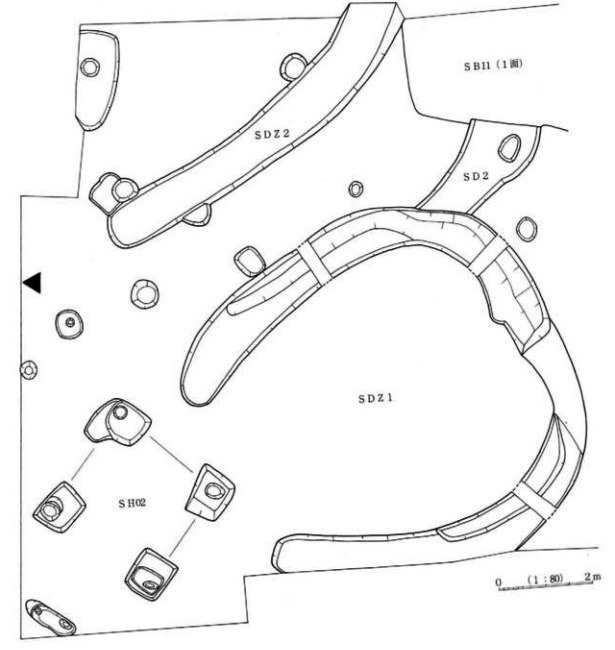


図96　Ⅳ区２次面遺構実測図①（S＝1/80）

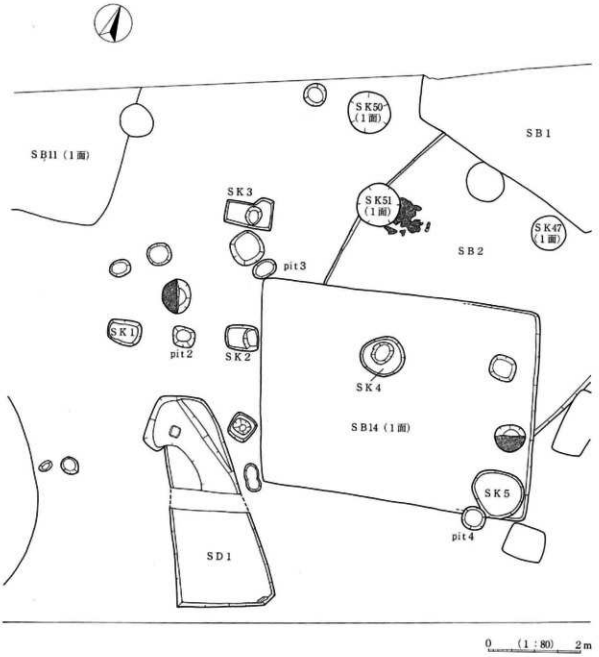
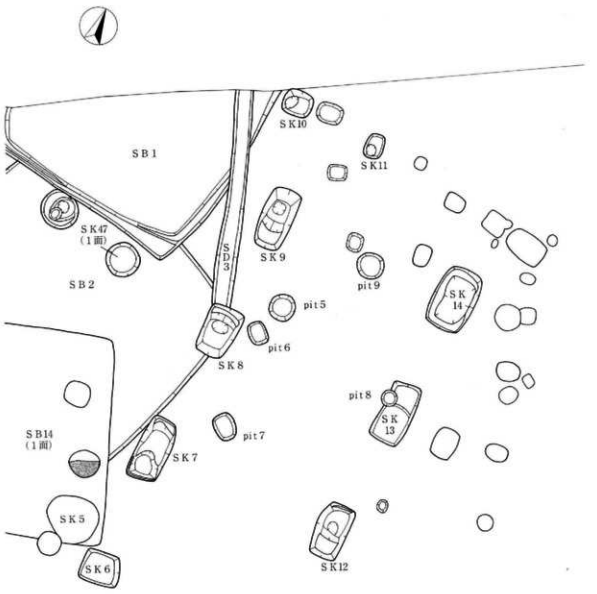
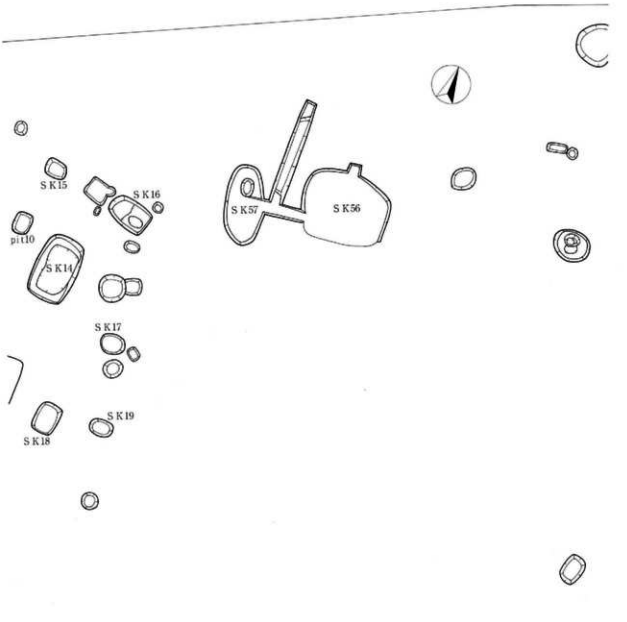


図97　Ⅳ区２次面遺構実測図②（S＝1/80）



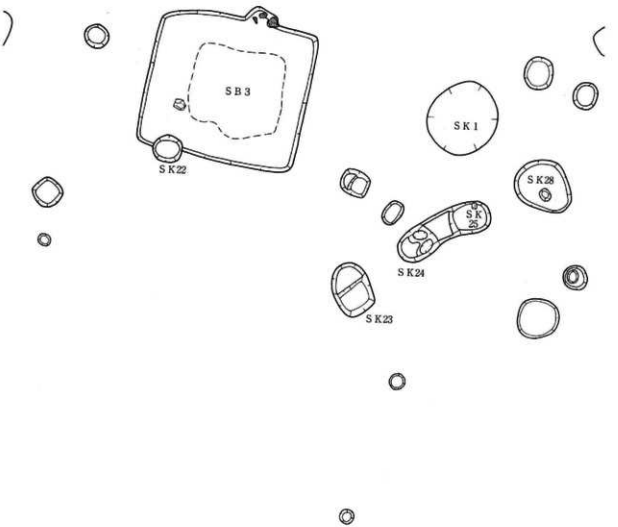
0 (1:80) 2m

図98 Ⅳ区2次面遺構実測図③ (S=1/80)



0 (1:80) 2m

図99 Ⅳ区2次面遺構実測図④ (S = 1/80)



0 (1:80) 2m

図100　Ⅳ区２次面遺構実測図⑤ (S＝1/80)

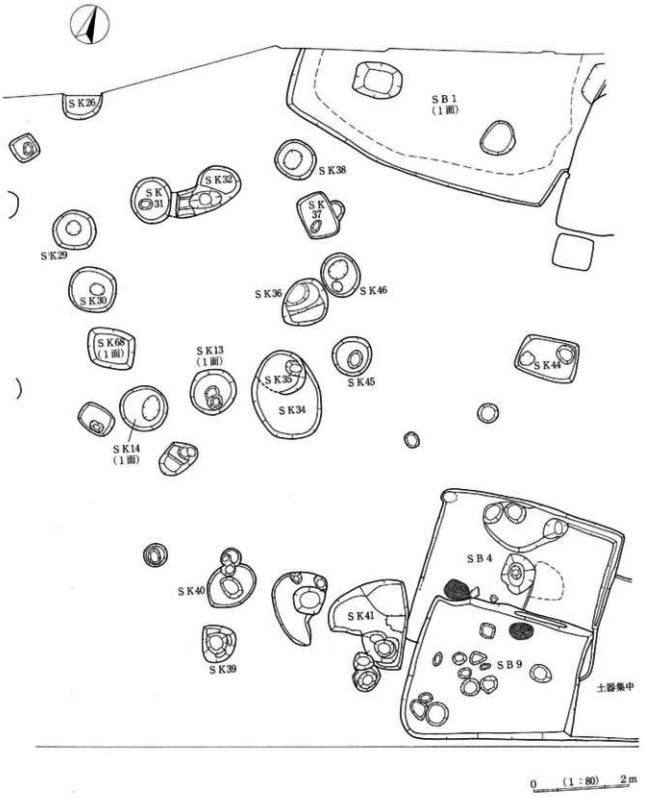


図101　Ⅳ区２次面遺構実測図⑥（S＝1/80）

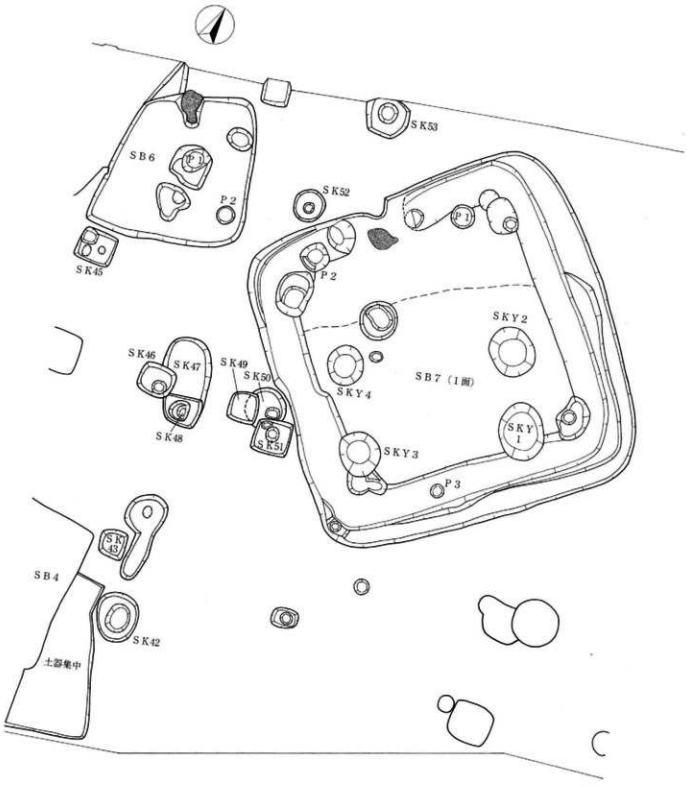


図102　Ⅳ区２次面遺構実測図⑦ (S = 1/80)

0　(1:80)　2m

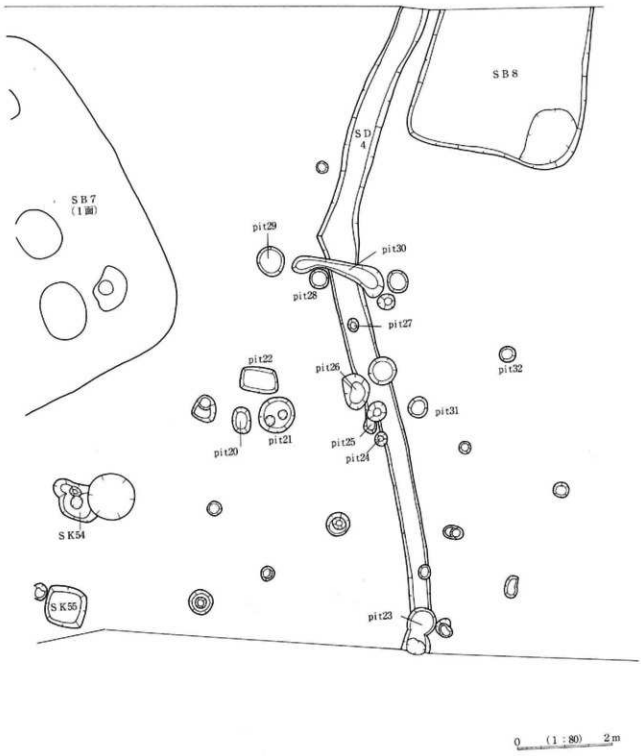


図103　Ⅳ区２次面遺構実測図⑧（（S＝1/80）

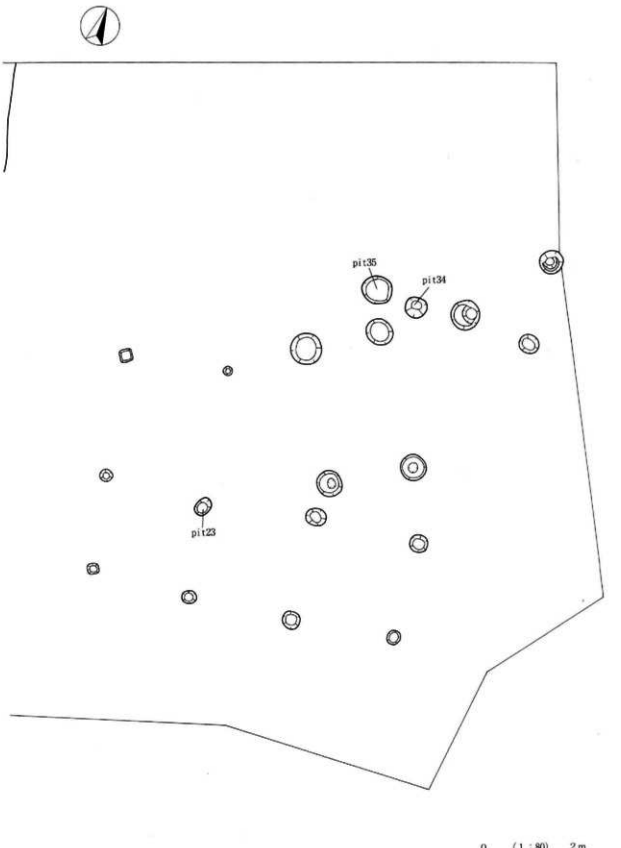


図104　Ⅳ区２次面遺構実測図⑨（S＝1/80）

SDZ01　調査区西端部で検出された円形周溝墓である。墳丘盛土は確認されなかったが、円形に巡る周溝が検出された。直径は周溝外法で約7.5m、周溝内法で6.5×5.7mを測る。周溝外形はほぼ円形を描くが、墳丘部は南北にやや長い楕円形を呈する。南側では周溝が途切れ、ブリッジ部が確認された。北側では周溝の途切れは認められず、ブリッジは1箇所である。ブリッジ幅は周溝端部間で約3.5mを測る。

周溝は幅約1mで断面形態はほぼ逆台形を呈するが、北側では周溝底をさらに掘り込み二段掘り状の形態となる。主軸上に当たる北側周溝ではこの掘り込み内より土器群が検出された。底部穿孔壺3・台付甕1・器台1・鉢1が、周溝内壁際に一列に並んだ状況で出土している。底部穿孔壺は東側に3点がまとまり、5と7（図108、以下同）は横転、6は底部が潰れていたが正置された状況で出土している。西側からは11の器台と8の鉢が横転して出土した。この両者の位置関係は、器台上に鉢が載せられて周溝底に正置されたものが横転したかのような状況であった。以上の土器群の出土状況からは周溝内への落ち込みとは考えずらく、意図的に配置された可能性が高いと想定される。このほか9と10の鉢は周溝内出土の破片で、墳丘上にも土器群が存在した可能性が考慮される。

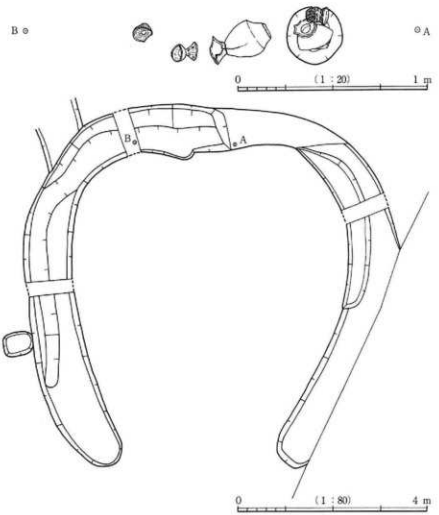


図105　ＳＤＺ01周溝内土器群出土状況実測図（Ｓ＝1/80）

写真70　ＳＤＺ01全景

写真71　ＳＤＺ01周溝内土器出土 状況

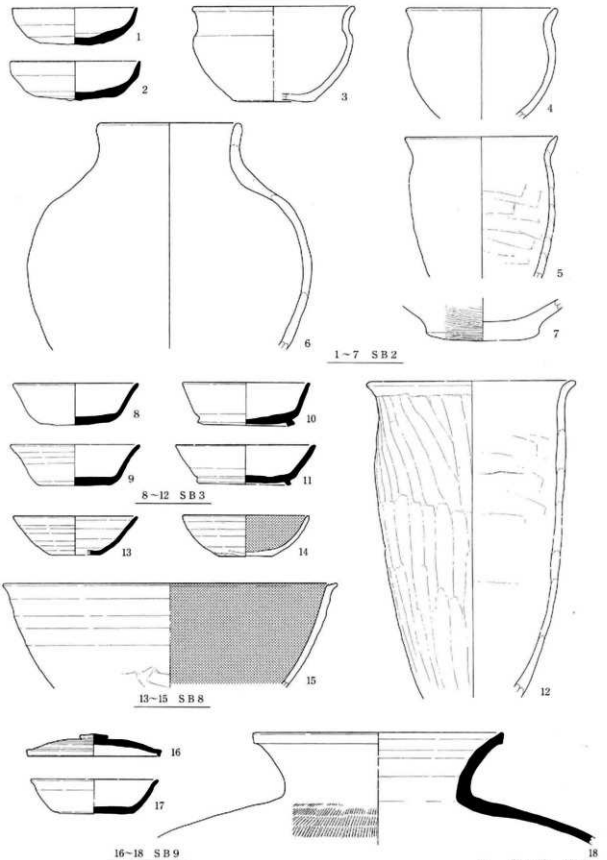


図106 Ⅳ区２次面出土土器実測図①（S＝1／4）

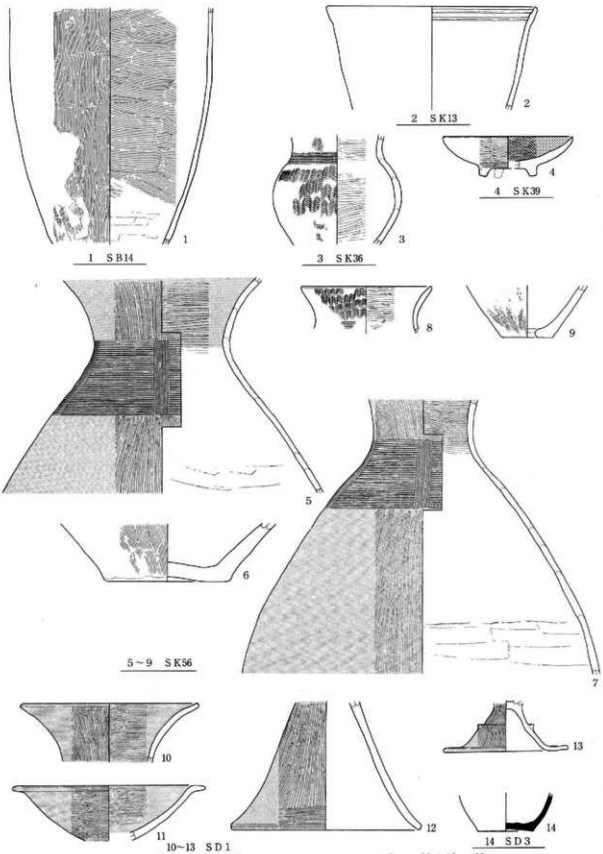


図107 Ⅳ区２次面出土土器実測図②（S＝1／4）

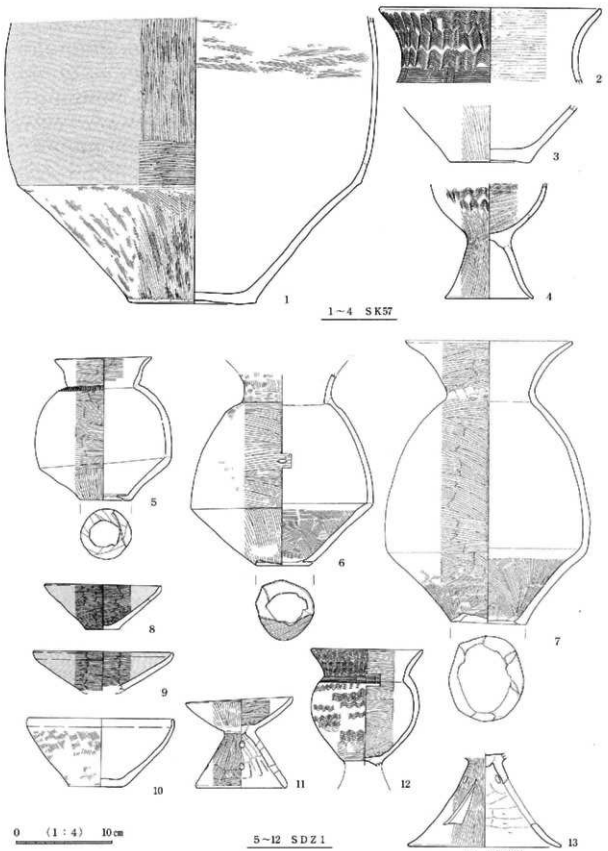


図108 Ⅳ区２次面出土土器実測図③ (S = 1 / 4)

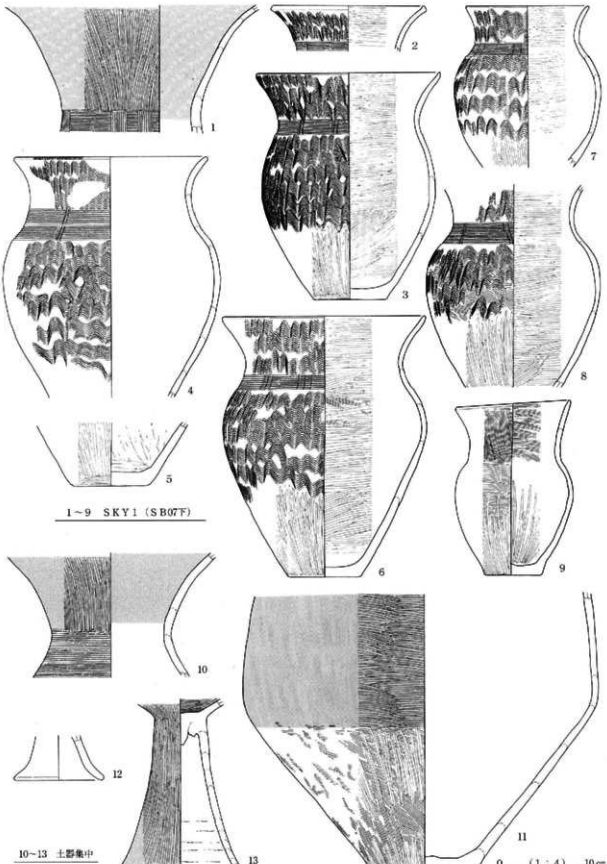


図109 Ⅳ区２次面出土土器実測図④ (S = 1 / 4)

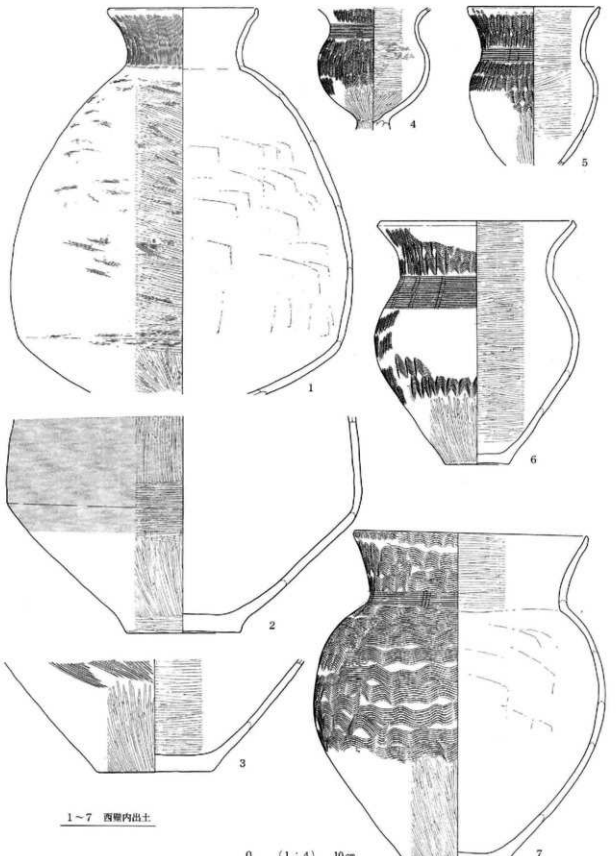


図110　Ⅳ区２次面出土土器実測図⑤（S＝1／4）

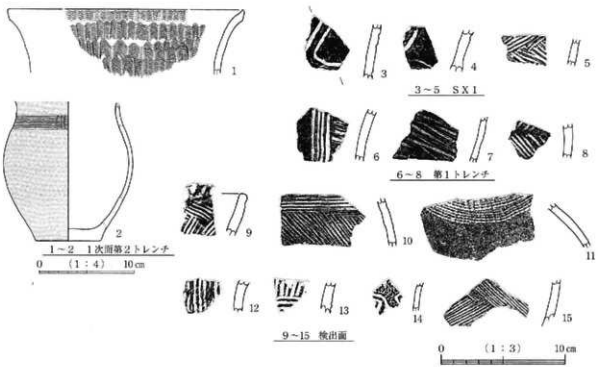


図111　Ⅳ区2次面出土土器実測図⑥（実測図：S＝1／4　拓影：S＝1／3）

写真72　1次面SB14

写真73　1次面SB14床面上焼土遺構

写真74　1次面SB10

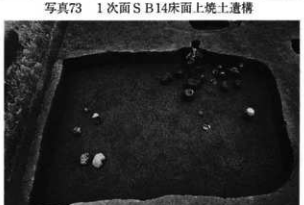


写真75　1次面SB05

写真76　1次面SK15

写真77　1次面SK07

写真78　1次面SB17・18

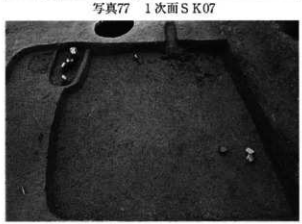


写真79　1次面SB19

写真80　1次面SB21

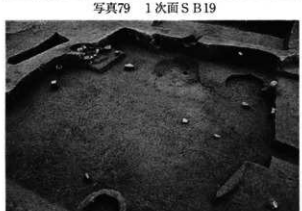


写真81　1次面SB22

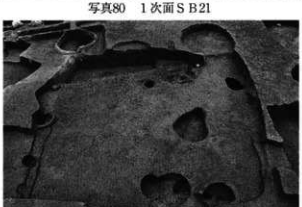


写真82　1次面SB23

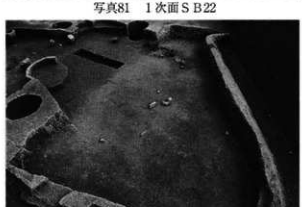


写真83　1次面SB24

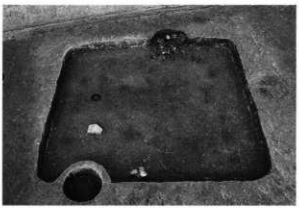


写真84　2次面ＳＢ03

写真85　2次面ＳＢ06

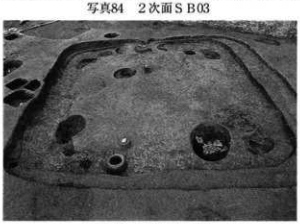


写真86　2次面ＳＢ07

写真87　2次面ＳＢ04

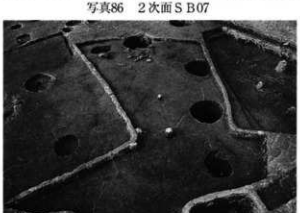


写真88　2次面ＳＢ02

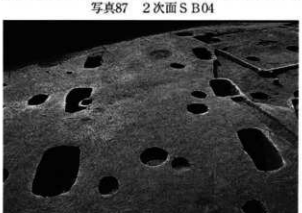


写真89　2次面ＳＫ06～09・12～14

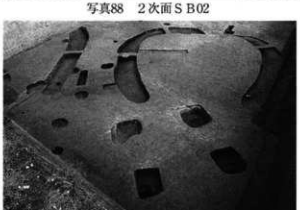


写真90　2次面ＳＤＺ01・02　ＳＨ02

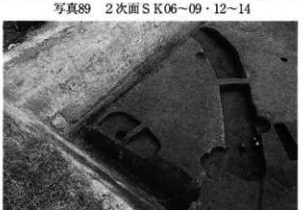


写真91　2次面ＳＤＺ02

Ⅷ　Ⅴ区の調査

Ⅴ区は東側でしなの鉄道軌道によってⅣ区と分断され、西側で㈶長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された北陸新幹線地点と接する。Ⅳ区同様に調査区の分割はなく、全面調査を実施した。

1　1次面の調査

検出された遺構は5軒の竪穴住居のほか、溝・土坑が検出され、いずれも平安時代に該当する。仁和洪水砂と想定される砂層に埋没した遺構はみられず、いずれも仁和洪水以前の遺構と判断される。

住居の分布状況は2次面にて検出された該期のSB06・07・10と合わせ、調査区全面に広がる。遺構重複はSB01と05、SB06と07においてのみ確認される程度で著しい重複はみられない。頻繁な建て替え等は想定しずらく、集落域が面的に広がっていたものと考えられる。

写真92　Ⅴ区1次面全景（東から）

写真93　Ⅴ区1次面全景（西から）

住居はカマドを持つものとカマドを持たないものの二者が認められ、カマドを持つ住居で明確な床面が確認された。カマドの方向はSB01・05・07が北東向き、SB06が東向きで、SB01・06において石材が認められた。特にSB01では火床をコ字形に囲むように石材が確認され、石材を芯材としてカマドを構築したことが確実視される。また、調査区中央北寄りで検出された焼土遺構は2次面SB06の煙道に該当する可能性が考えられる。カマドを持たないものについても部分的ながら貼床が確認でき、建物跡である可能性が極めて高い。住居に付随する作業施設等の性格が想定されよう。なお、柱穴はすべての住居において検出されなかった。

地点名	遺構名	時代	重複関係		床面	付属施設	特記事項	備考	遺構図版番号	土層図版番号	写真番号
			先	後	柱穴						
Ⅴ区1次面	SB01	平安		SB05	硬化面	石組カマド（北壁）	土器は床面より出土		112	114	94
					なし						95
Ⅴ区1次面	SB02	平安か			貼床（東側一部）				112		96
					なし						
Ⅴ区1次面	SB03	平安か		SD03	貼床（南側一部）				112		97
					なし						
Ⅴ区1次面	SB04	平安か			硬化面	煙道（西壁）	カマドに伴う焼土など検出されず		112	114	98
					なし						
Ⅴ区1次面	SB05	平安	SB01		硬化面	カマド（北壁）	カマド煙道未検出		112	114	99
					なし						
Ⅴ区1次面	SK01	平安		SD04				2次面にて底部確認	112	114	
Ⅴ区1次面	SK03	奈良～平安		SB05			底部に炭散布		112	114	101

表13　Ⅴ区1次面主要検出遺構一覧表

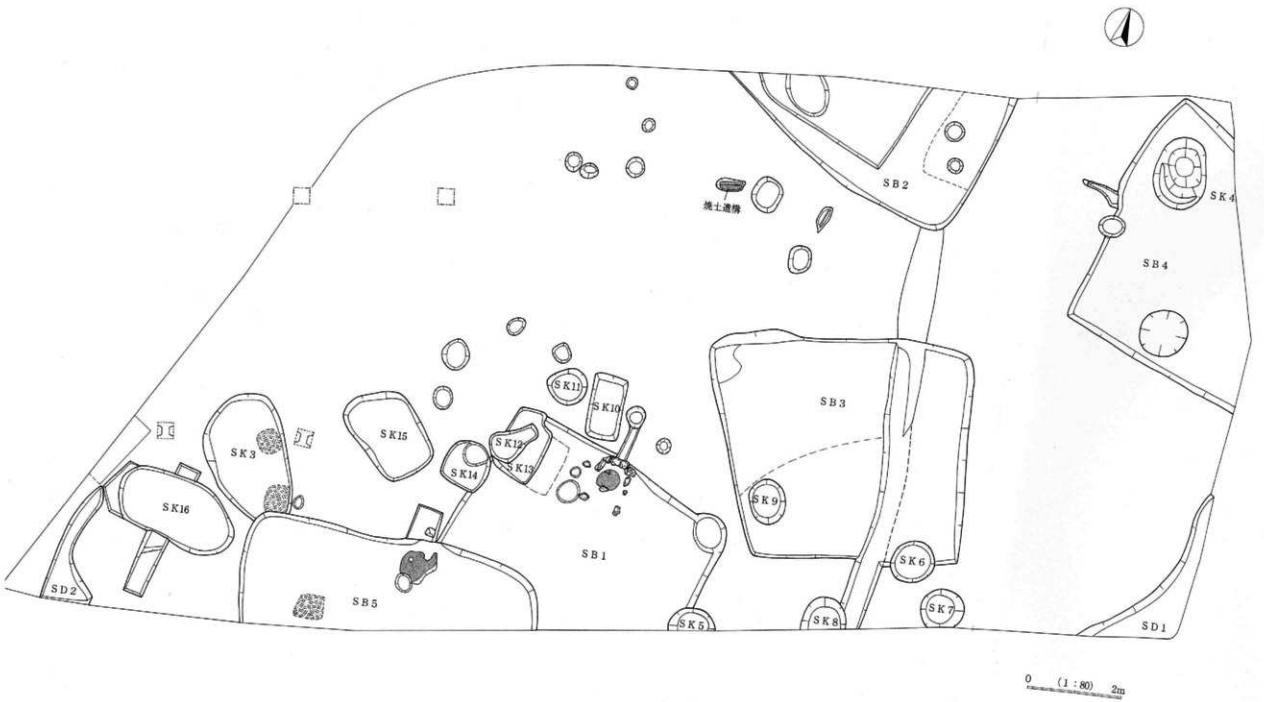


図112　V区1次面遺構実測図（S＝1/80）

写真94　ＳＢ01

写真95　ＳＢ01カマド

写真96　ＳＢ02

写真97　ＳＢ03

写真98　ＳＢ04

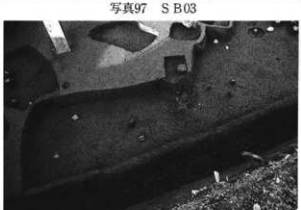


写真99　ＳＢ05

写真100　焼土遺構（２次面ＳＢ06煙道か）

写真101　ＳＫ03とＳＫ16

2　2次面の調査

写真102　V区2次面全景（西から）

10軒の竪穴住居が検出され、弥生時代後期1軒・古墳時代後期1軒・奈良時代2軒を数え、他は平安時代となる。1・2次面あわせ、平安時代遺構は調査区全面に広がりをみせる。

奈良時代は竪穴住居（SB16）1軒が確認された。平安時代住居に破壊され、カマド等の施設は確認されなかった。古墳時代後期は竪穴住居（SB11）が調査区東端部で検出された。カマドは北西向きで、貼床が確認されたが、柱穴の検出はない。東側約½が調査区外となるが出土土器は豊富で、カマド周辺を主に杯・椀・甕・広口壺・甕が出土し、良好な器種構成を示している。弥生時代後期は竪穴住居（SB17）1軒が西側端部付近で検出された。明確な床面・柱穴・炉跡等の生活施設の検出がなく、竪穴住居と判断する根拠は希薄であるが、遺物は床と捉えた面より出土している。この弥生時代後期遺構は西側の新幹線地点やVI区で確認された遺構群と集落域を形成するものと考えられるが、その希薄性は注目される。ここで弥生時代遺構の確認面の標高に着目すると、V区2次面がSB17確認面で354.026m、IV区2次面がSD202確認面で352.816mとV区が1m程高く、現在のしなの鉄道軌道付近を境に地形変換があったことをうかがわせる。V区における該期遺構の分布の希薄性はこの地形に制約されたものと捉えられ、篠ノ井遺跡群における弥生時代後期集落の東限を示すものと捉えられよう。

また、古墳時代後期～奈良時代にかけても弥生時代後期同様に分布上の希薄性がみられるが、同時期遺構の広がりは西側隣接のVI区・新幹線地点、東側隣接のIV区で確実に確認され、弥生時代後期に比して東側を主に広範囲に展開する。さらにI～IV区における検出遺構の所属時期が時代の下降につれて東に分布域を広げるという傾向からは、弥生時代後期に集落域の東限と認識されていた微高地形を越えてより東側へ居住域が拡大し始めたのが古墳時代後期と認識される。弥生時代後期以降の断絶を打ち破って出現した該期遺構の存在は、集落域の拡大に伴う新たな開発が着手されたことを示すと考えられる。

地点名	遺構名	時代	重複関係		床面	付属施設	特記事項	備考	遺構図版番号	土器図版番号	写真番号
			先	後	住穴						
V区2次面	SB06	平安	SB07・08		貼床	カマド（東壁）		1次面検出遺構が確認となる可能性が高い	113	114	103 100
					1（P2）						
V区2次面	SB07	奈良～平安	SB08	SB06	貼床	カマド（北壁）			113		104
					なし						
V区2次面	SB10	奈良～平安				カマド（南東壁）	隅部のみ検出		113		
V区2次面	SB11	古墳後期		SB01	貼床	カマド（北壁） 壁溝	土器は床面より出土		113	115	107 108 109 110
					なし						
V区2次面	SB14	平安か			貼床	カマド（北壁隅部）			113		105
					なし						
V区2次面	SB16	奈良	SB17	SB06・07	貼床				113	114	
					1						
V区2次面	SB17	弥生後期		SB08	掘削		土器は床面より出土	住居跡であるか不明	113	114	106
					なし						

表14　V区2次面主要検出遺構一覧表

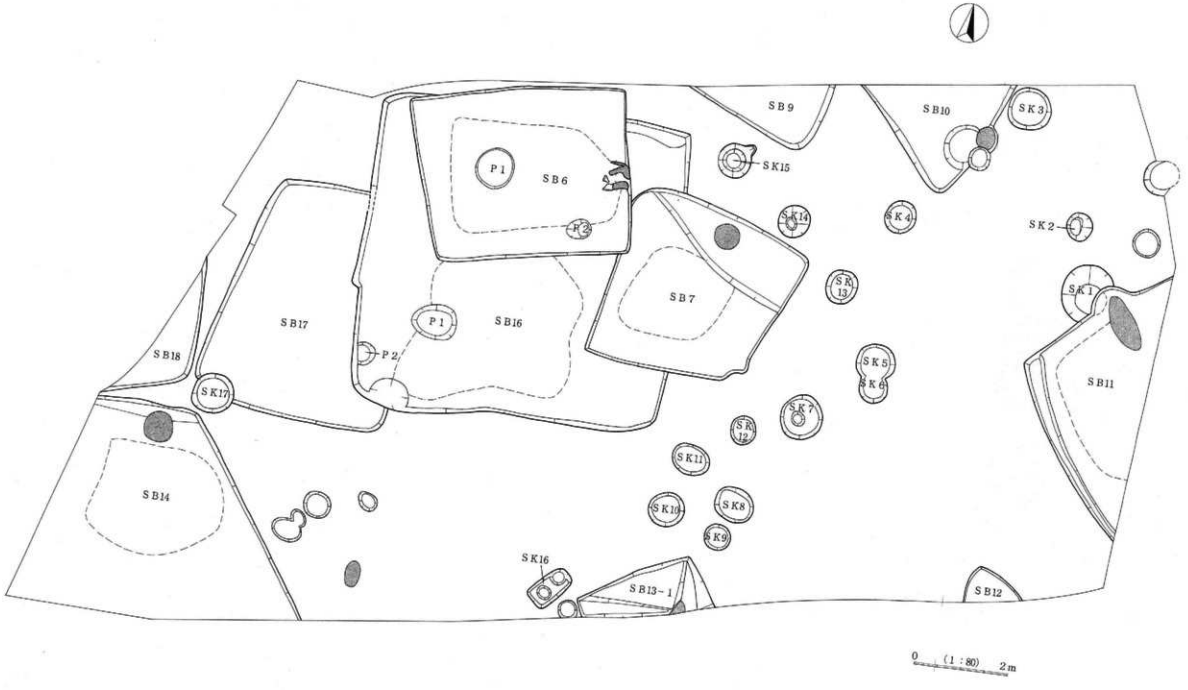


図113　V区２次面遺構実測図（S＝1/80）

写真103　ＳＢ06

写真104　ＳＢ07

写真105　ＳＢ14

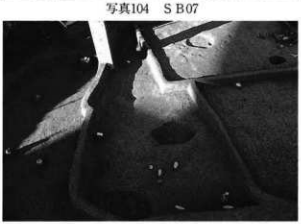


写真106　ＳＢ17

写真107　ＳＢ11

写真108　ＳＢ11

写真109　ＳＢ11焼土上遺物出土状況

写真110　ＳＢ11床面上遺物出土状況

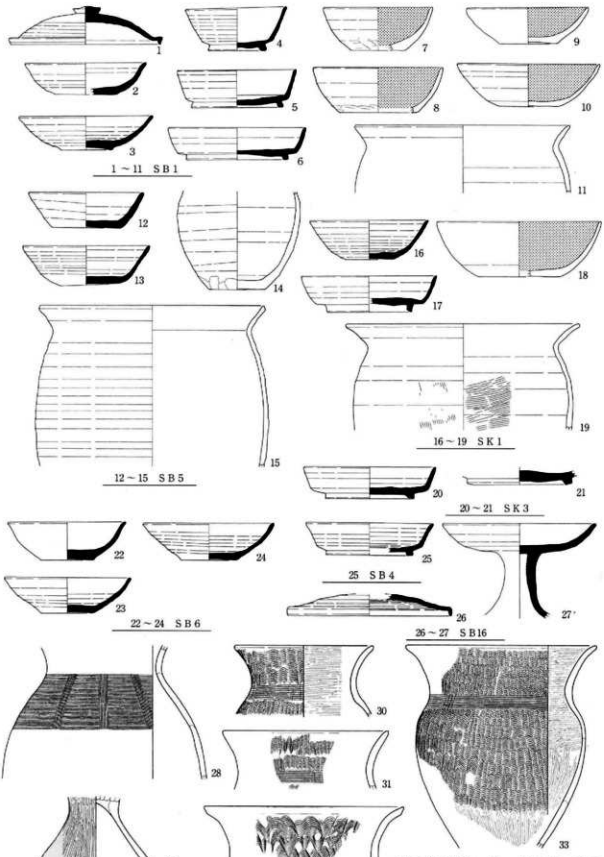


図114 V区1・2次面出土土器実測図 (S=1/4)

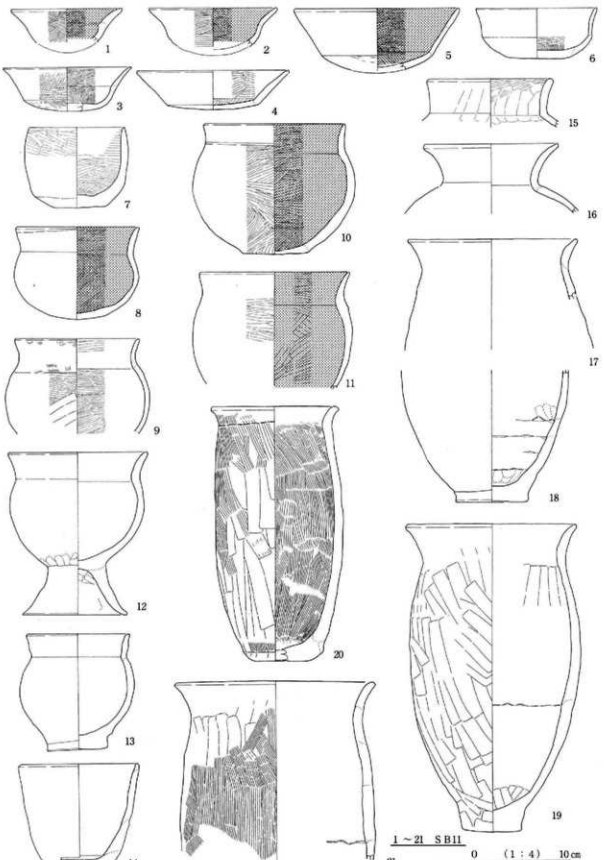


図115 V区2次面出土土器実測図 (S＝1／4)

Ⅸ　Ⅵ区の調査

Ⅵ区は北陸新幹線建設用道路により南北に２分割（N・S区）し、調査区内を縦断する水道管保護のために東西に２分割（１・２区）した。さらにS区では隣接地への出入口確保のため、細分割（２・３区）し、都合５地点に分けて発掘調査を実施した。各地点ともに１・２次面調査を実施し、S-３地点のみ３次面を設定している。この各調査面は間に堆積土を挟まず、上面遺構底部直下に連続する。このため、時代に対応した調査面というよりは下層遺構調査のために上層遺構を除去したという作業上の確認面である。この点において、Ⅳ区以東地域とは異なり、地形形成に伴う土壌堆積の違いを示すと考えられる。

1　１次面の調査

古墳時代後期から平安時代を主体とする。また、S-2地点を中心に弥生時代後期遺構も確認された。

方形ピット群　S-3地点では南北ならびに東西方向に列をなした方形の小型ピット群が検出された。覆土はいずれも黄褐色砂質土の単一層であった。出土遺物は下層に遺構が存在する場合のみみられ、直接伴うと判断される事例はない。このため時期の特定は難しいが、検出されたすべての遺構を掘り込んでいて、最も新しい時期の所産と考えられる。なお、S-3地点以外でも部分的に分布は確認され、本来は全面に展開していたと考えられる。

写真111　S-3地点方形ピット群

中世　明確な中世遺構は存在しないが、円形・素掘の井戸群の大半は該期に属する可能性が高いと判断される。

平安時代　竪穴住居・溝・土坑等が検出されている。竪穴住居は11軒程度が調査区を横断するN-2地点SD10・11、S-2地点SD01以東地域に遺構間の重複がほとんどみられない散発的な状況で展開する。東側の北陸新幹線地点やⅤ区と同様なあり方で、一連の集落域を形成すると捉えられる。出土遺物では、検出面より数点出土した瓦塔片が特筆される。いずれも小片で、破片間の接合などは認められない。南東側に隣接する北陸新幹線地点からは瓦塔が２個体出土しており、同一個体の可能性も想起される。

奈良時代　検出遺構数が多く、弥生時代とならんで本地区の中心的時代となる。特に調査区東側（S-1・N-1区）での遺構密集度が高い。東側に隣接する北陸新幹線地点北側調査区の密集度に通じ、北陸新幹線地点南側・Ⅳ・Ⅴ区での散発的な分布状況とは対比的で際立つ。該期遺構の分布の中心が本地点から北東側にかけて存在することが確実視できよう。竪穴住居のカマド方向は北・西・東と様々である。特に事例が少ない東向きがみられる点は、細別時期の比較検討をとおして集落構造を把握するうえで見逃せない。

写真112　N-1地点ＳＢ35

N-1区SB35は不整形の土坑であるが、土坑内に堆積した砂層中より２点の甑仏と埴輪片が出土した。これら遺物が出土した砂層は仁和洪水砂との間に間層を挟み、仁和洪水以前に形成されたことが確実である。遺跡全体を覆うほどではないが、小規模洪水等が発生していたことを示唆しよう。甑仏は２点出土し、同笵品である。また、埴輪は底部片を含む小破片が数点出土している。これら遺物の概要については後述するが、自然堆積ではみられない砂層中出土ということから、近隣に埴輪を樹立した古墳や甑仏を使用した仏教関連遺構の存在を示唆し、注目される。特に甑仏に関しては検出面出土の瓦塔片や新幹線地点出土の甑仏・瓦塔と合わせ、仏教関連遺物の集中が認められ、村落内寺院等との関わりで注意される。

古墳時代後期　N-2区・S-3区で竪穴住居が５軒、N-1区で井戸１基が検出されている。分布状況は希薄で、新幹線地点での全面展開とは大きく異なる。N-2区SB50は一辺7.3mを測る竪穴住居で、群を抜いて大きい。床面上には多量の炭の散布が認められ、性格が他と異なる可能性が想起される。

弥生時代後期　S-2地点を中心に竪穴住居・土坑が検出された。後出遺構の重複が少ない地点で検出され、さらに２次面で新たな遺構の検出がなかったことから、一括して２次面にて取り扱うこととする。

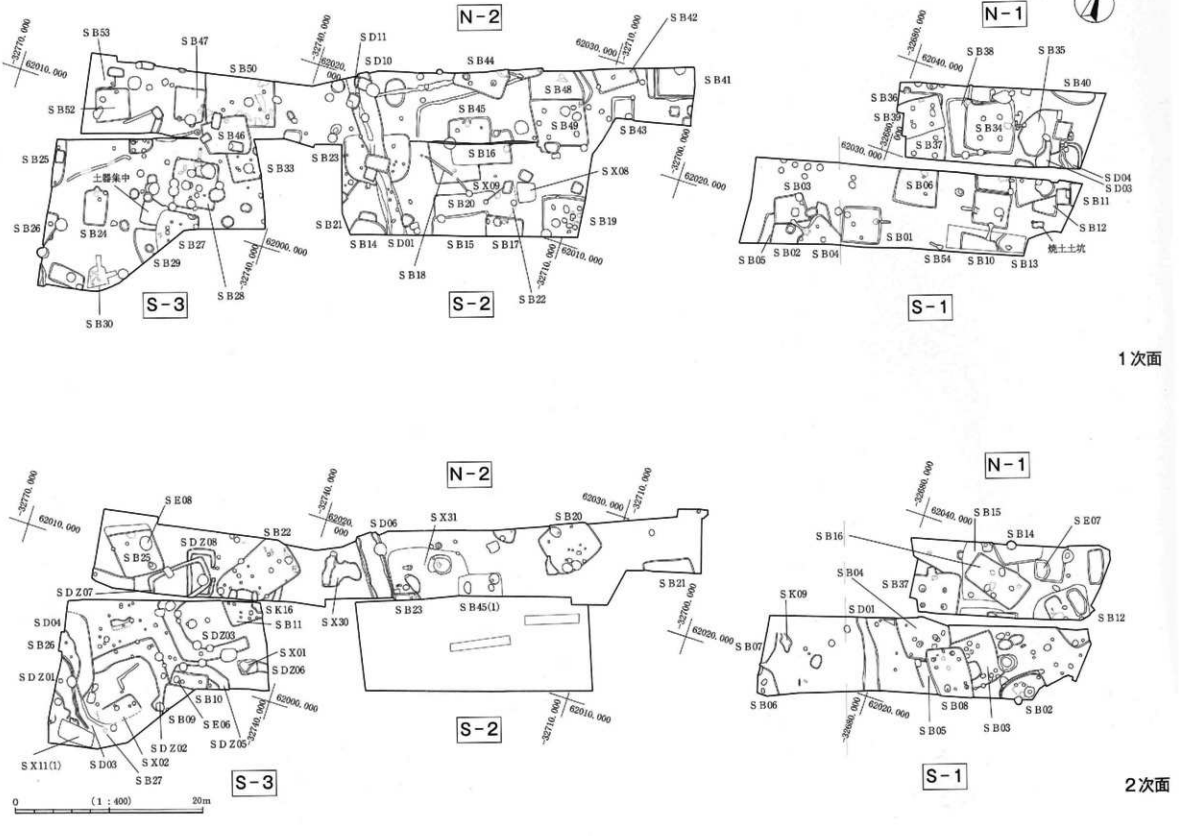


図116　Ⅵ区１・２次面遺構分布図（S = 1/400）

地点名	遺構名	時代	重複関係		炭（灰）層	付属施設	特記事項	備考	遺構図 図番号	土器図 図番号	写真 番号
			先	後	特定						
S-3	SI324	奈良か			層化面	カマド火床（北壁）			117		126
					なし						
S-3	SI326	古墳後期		SI206	散漫				117	132	
					1						
S-3	SI327	奈良	SI329 土器集中		壁床		西壁側に焼土（カマド残欠か）		117	135	127
					明確な柱穴なし						
S-3	SI328	奈良		SE（8基） SX12 SK31・32	壁床	カマド（北壁）		平面する井戸は SE 8～10・12～16の8基	117 118 119	135	
					なし		床上に炭散布				
S-3	SI329	弥生後期		SI327	散漫				117	135	
					なし						
S-3	SI330	不明			硬化面		焼土と炭が散布し、住居跡の可能性が想定されたが、掘土が不明確でプラン把握は不充分		117		
					なし						
S-3	土器集中	弥生後期		SI327	散漫		不整方形の浅い掘り込み内より土器出土	貯蔵穴形態より土器出土	117	145	
					なし						
N-2	SI347	奈良～平安		SE227	壁床	カマド火床（東壁）	土玉出土		118		
					なし						
N-2	SI352	弥生～古墳		SK67	散漫			住居とする積極的根拠は希薄	118	138	
					なし						
N-2	P1353		SI353				SI353を確実に掘り込む	SI353を住居とする根拠は希薄	118	139	
N-2	SI346	奈良	SI33・50	SK57 SX13・19	壁床	カマド（火床 北壁）		S-3区では SI332と同一住居 SI461に統一した	119	137	
					なし						
N-2	SI350	古墳後期		SI345 SK60 SE26 SX19	壁床		床面上に焼多量散布 貯蔵2点出土		119	137	121
					2						
N-2	SI360	弥生～古墳		SI350					119	139	
S-3	SI333	奈良以前		SI346 SK13	硬化面		床面直上より鍛鉄束出土		119		
					なし						
S-3	SI339	奈良以降	SI328 SK31		平坦	竈跡	焼土遺物は混入と判断される	湧水なし	119	139	
N-2	SI355	弥生後期		SD10・11 SK17					120	139	
N-2	SD10	奈良以降	SD11	SK17 SE21 SX18 SD12			S-2地点 SD01と同一遺構		120		
S-2	SD01	奈良以降	SI823	SK20 SX02・05			N-2 地点 SD10と 同一遺構		120		
S-2	SI823	弥生後期		SI821 SD01 SX02・05	散漫		炭化材・焼土・炭が床面上に広く分布		120	134	125
					6						
S-2	SI814	弥生後期	SI821	SX09	散漫				120	131	
					なし						
S-2	SI821	弥生後期	SI823	SI814 SD01	散漫		西壁と北壁の一部を SD 23下で確認		120	132	
					なし						
N-2	SI844	古墳後期	SI851	SD06・07	貼床	カマド残欠（東壁）			121	137	
					2						
N-2	SI845	平安	SK70	（SI816）	貼床	カマド（北壁）	北東隅部に東面と周辺を焼んで炭と灰が互層をなして堆積	S-2 地点では SI316東面床下に存在したと想定されるが、確認できなかった	121	138	120
					なし						
S-2	SI816	平安	SI818 SK70	SI854	貼床	カマド火床（東壁）		N-2 地点では SI845の調査により、確認できなかった	121	131	
					2						
S-2	SI822	奈良	SI820 SX08	SI817 SK22	貼床	カマド火床（北西壁）		SI815・20の調査過程で検出されたため、プラン把握が不充分	121 122	132	
					1						

地点名	遺構名	時代	重複関係		床（壁）溝	付属施設	特記事項	備考	遺物図版番号	土器観察表番号	写真番号
			先	後	柱穴						
S-2	SB18	弥生後期		SB16	硬化面				121	131	
					なし						
S-2	SB15	弥生後期	SB20・22 SX03	SB17	周溝				121	131	
					なし						
S-2	SB20	弥生後期		SB15・22	施設				121	133 134	
					なし						
S-2	SX09	弥生後期					覆土中より多量の土器出土	SB16と SB20の間	121	144 145	
N-2	SB48	古墳～奈良	SD51 SD59	SB49	貼床	カマド火床（北壁側）	北壁の検出は不完全		122	138	
					なし	周囲に焼敷面					
N-2	SB49	平安	SB48	SE20 SX04	貼床	北東隅部に焼土と炭（カマド残欠か）	自玉3点出土		122	138	
					4						
N-2	SK58	弥生～ 古墳か							122	139	
S-2	SB17	平安	SB15・22		貼床	カマド（北壁）			121	130	
					なし	カマド脇に土坑			122		
S-2	SB19	奈良		SK21	硬化面		水晶製電子玉出土	東側土に焼土と炭が散在しているが、カマド等との関係は不明	122	132	124
					2						
S-2	SK21	平安	SB19		平底				122	139	
S-2	SK34	古墳後 ～奈良							122	139	
S-2	SX08	弥生後期		SB22			覆土中より多量の土器出土	土器埋納坑	122 128	140 ～143	128 129
N-2	SB41	奈良～平安		SE19	硬化				123	136	
					なし						
N-2	SB42	不明			貼床	カマド火床（東壁）			123		
					なし						
N-2	SB43	不明			硬化		硬化面は高く、奈良時代以降である可能性が高い	住居の可能性低い	123		
					なし						
S-1	SB02	奈良～平安	SB03	SB04	硬化				124		
					なし						
S-1	SB03	奈良	SB05	SB02・04 SX04・06	貼床				124	129	
					なし						
S-1	SB04	（奈良～） 平安	SB02・05 （SB01）		硬化面	カマド（北西壁）	焼面先端部に石材	SB01との重複把握は壁際のため完全でないが、SB01に先行と判断	124 125	129	123
					1						
S-1	SB05	不明		SB02・04	硬化			重複状況からは奈良時代以前	124		
					なし						
N-1	SB36	奈良		SB39	貼床	カマド残欠（北壁）		SB37との重複関係は不明	125	137	119
					未検出						
N-1	SB37	奈良		SB39	貼床			SB36との重複関係は不明	125 126	137	119
					3						
N-1	SB39	平安	SB36・37		貼床	カマド残欠（北壁） 焼面は検出されず	自玉2点出土		125	136	119
					4						
S-1	SB01	奈良		SK03 （SB04）	貼床	カマド（東壁）		SB04との重複把握は壁際のため完全でないが、SB04に先行と判断	125	129	
					2						
S-1	SB06	奈良～平安			壁溝	カマド残欠（北壁）	弥生土器混入 焼面遺構は不明	SB37との重複関係は不明	125	129	
					なし						
S-1	SK13	奈良～平安							125	139	
N-1	SB34	奈良	SB35 SD38	SK45・47	貼床	カマド（東壁）	北壁外側に掘込が確認され、本住居に破壊された住居が存在した可能性が高い		126	135	118
					4						
N-1	SB38	奈良		SB34 SK47・48	貼床	カマド（北壁）		焼面は長く、先端部は調査区外まで延びる	126	135	118
					なし						
S-1	SB07	平安			硬化面	カマド（東壁） 石材あり		N-1区では検出されず、N-1区まで及ばない小型住居と考えられる	126	129	
					なし						
S-1	SB09	奈良		SB10	硬化面	カマド（西壁） 石芯構造	カマド前面のみ貼床状の硬化面が確認された		126	130	122
					なし						
S-1	SB10	平安	SB09		貼床	カマド火床 （北壁東隅部）			126	129	
					なし						
S-1	SB13	奈良			貼床			住居の可能性は低い	126 127	129	
					なし						

地点名	遺構名	時代	重複関係		埋（施）設	付属施設	特記事項		備考	遺構図版番号	土器図版番号	写真番号
			先	後	柱穴							
S-1	SB54	不明					焼道のみが検出され、調査区外に竪穴住居の存在が確実視される			126		
N-1	SB40	奈良			焼剥		住居の可能性は低く、梅円形土坑の可能性が高い			127	137	
					なし							
N-1	SB35	古墳後～奈良		SB34 SD03 SK41 SK15	焼剥	西隅は円形の土坑状の張り込みがあり、遺物より出土	鉄刀・砥石・玉出土 遺物は仁和寺未公開の新土より出土し、明らかな流入である	住居とする積極的根拠なく、周辺遺構同様に不整形土坑の可能性が高い		127	136	112
					なし							
N-1	SD03	奈良	SB35	SK41			N-1 地点 SX01と同一遺構の可能性大			127	139	
N-1	SD04	奈良							S-1 地点まで連続しない	127	139	
S-1	SB08	奈良		SK07・08 SX01	焼剥			住居の可能性低く、不整形土坑の可能性が高い		127	130	
					なし							
S-1	SB11	奈良か			焼剥			住居跡ではなく、方形土坑の可能性が高い		127	129	
					なし							
S-1	、	、			平退		土坑内より板状石が横臥出土	竪土中に祓土・炭を含むが壁面の焼けはほとんどみられない		127		
	祓土土坑	奈良以降										

表15　Ⅵ区１次面主要検出遺構一覧表

写真113　N-2地点１次面（東から）

写真114　S-1地点１次面（東から）

写真115　S-2地点１次面（東から）

写真116　N-1地点１次面（西から）

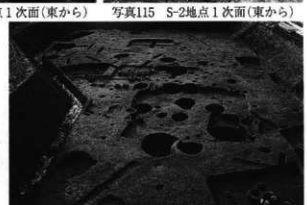


写真117　S-3地点１次面（東から）

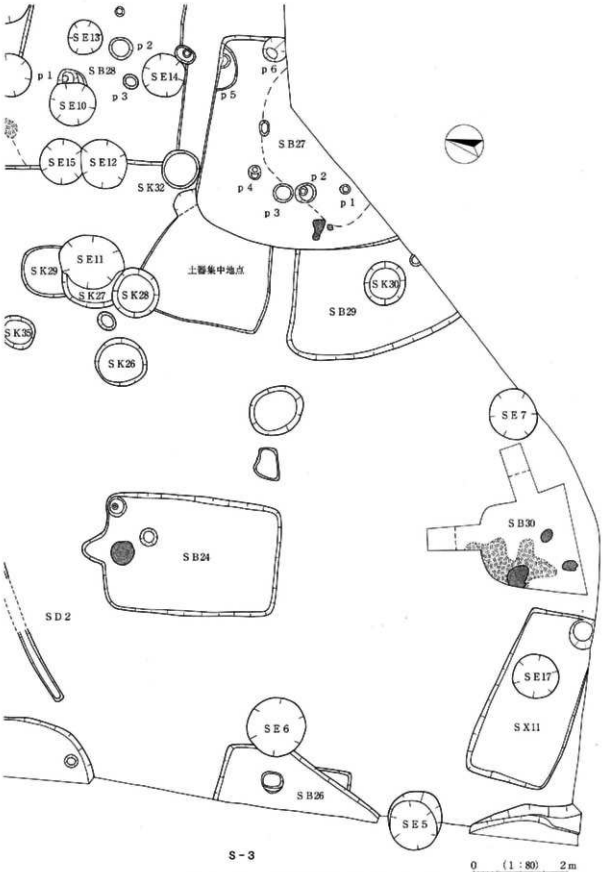


図117　Ⅵ区１次面遺構実測図①（S＝1/80）

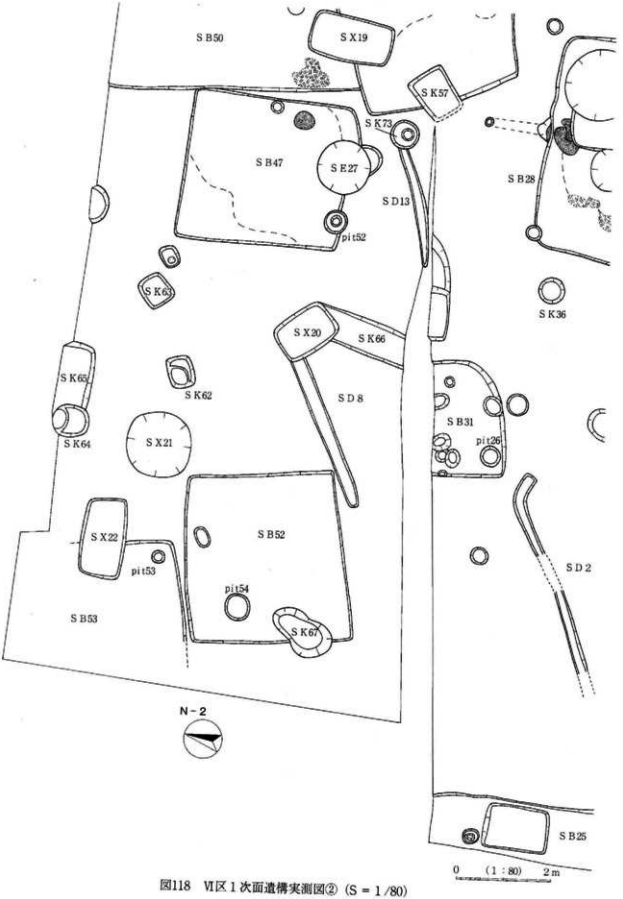


図118 Ⅵ区１次面遺構実測図② (S = 1/80)

図119　Ⅵ区1次面遺構実測図③ (S = 1/80)

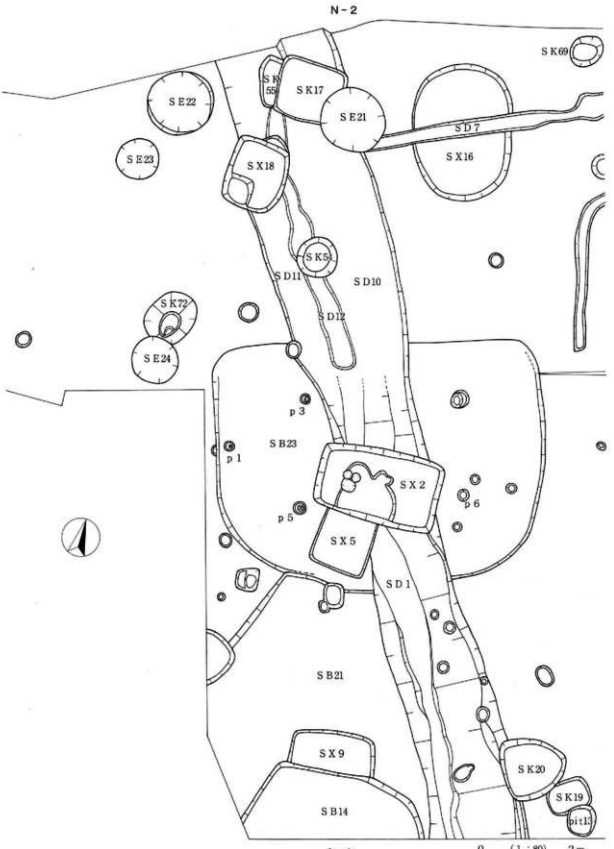


図120　Ⅵ区１次面遺構実測図④ (S = 1 /80)

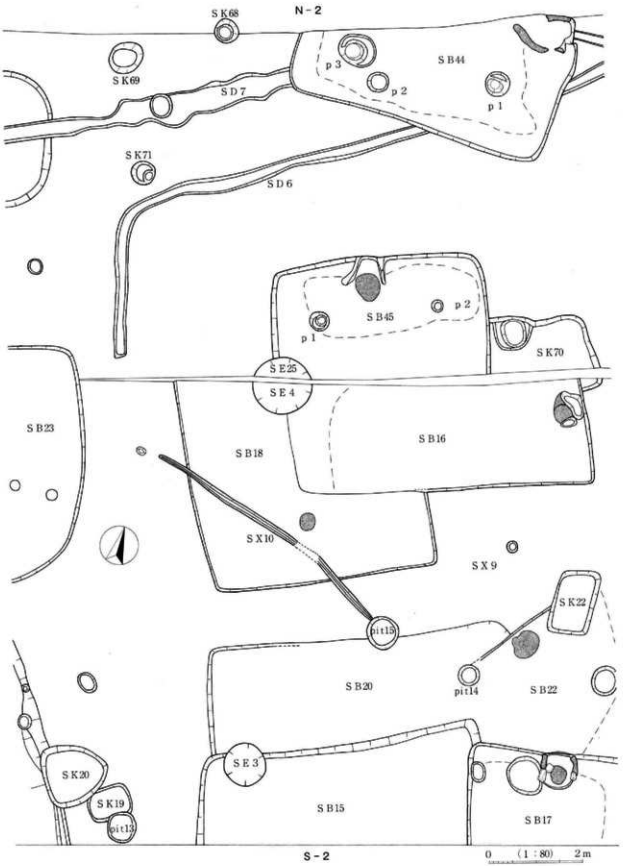


図121　Ⅵ区１次面遺構実測図⑤（S＝1/80）

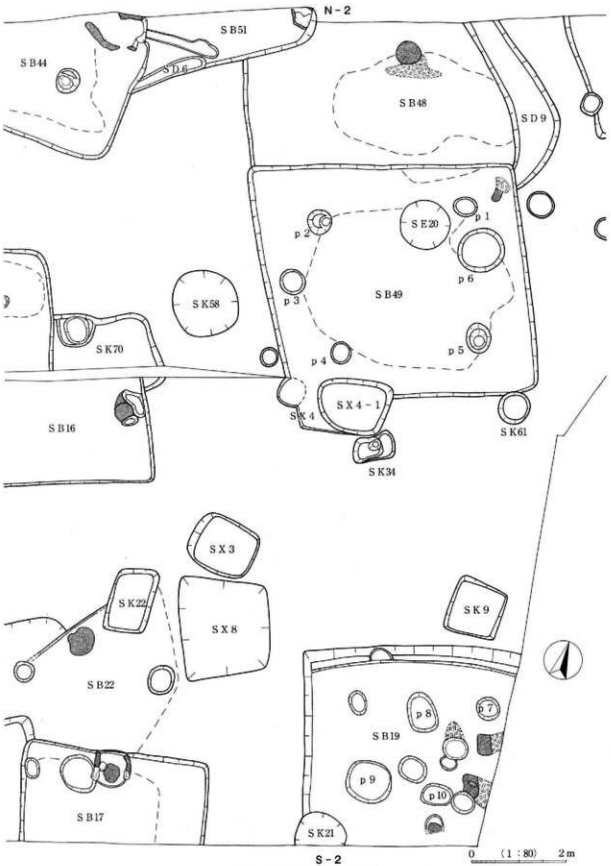


図122　Ⅵ区1次面遺構実測図⑥（S＝1/80）

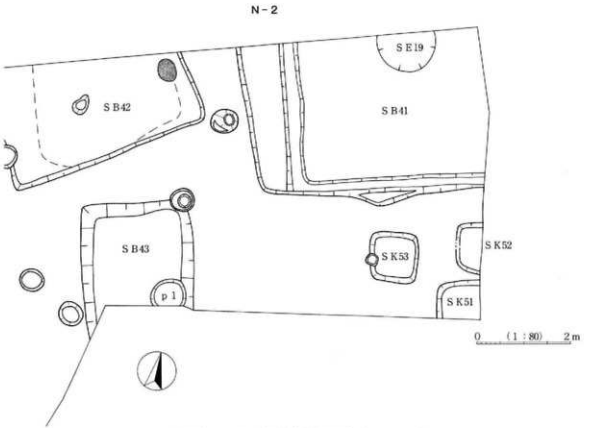


図123　Ⅵ区１次面遺構実測図⑦（S＝１/80）

写真118　N－１地点ＳＢ34・38

写真119　N－１地点ＳＢ36・37・39

写真120　N－２地点ＳＢ45

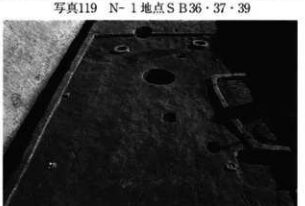


写真121　N－２地点ＳＢ50

写真122　S－１地点ＳＢ09

写真123　S－１地点ＳＢ04

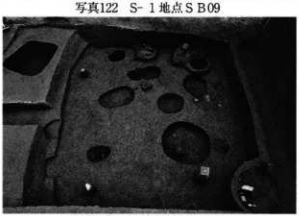


写真124　S－２地点ＳＢ19

写真125　S－２地点ＳＢ23

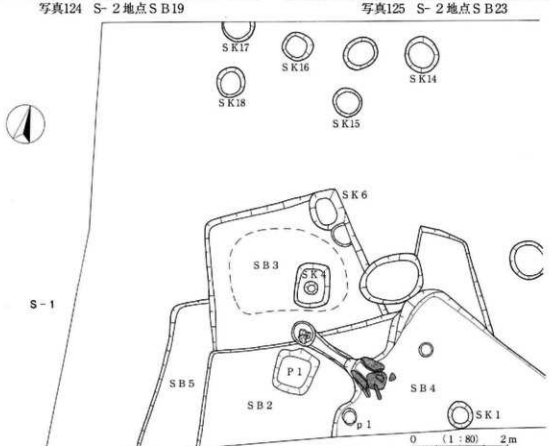


図124　Ⅵ区１次面遺構実測図⑧（S＝１/80）

写真126　S－３地点ＳＢ24

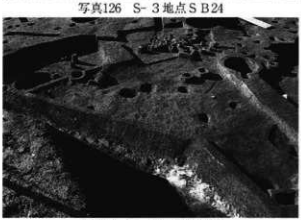
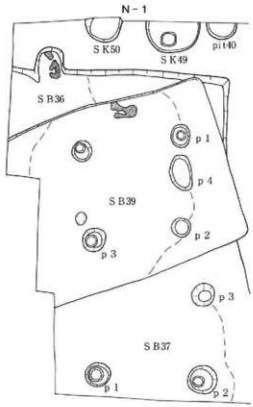


写真12　S－３地点ＳＢ27



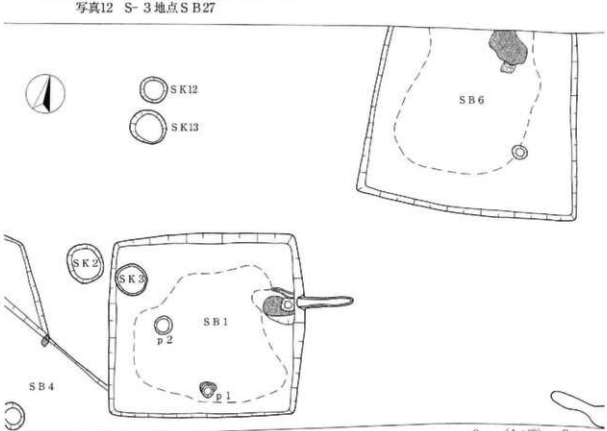


図125　Ⅵ区１次面遺構実測図⑨（S＝1/80）

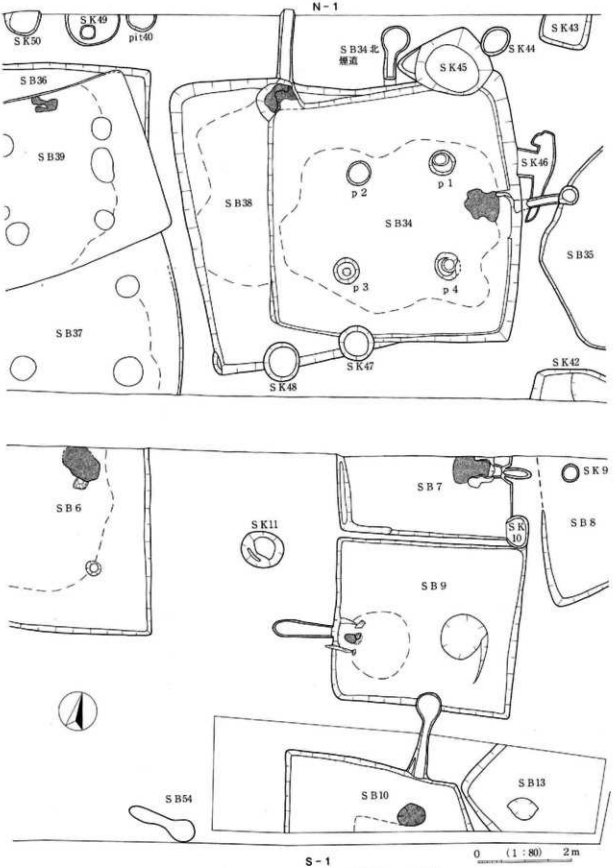


図126　Ⅵ区１次面遺構実測図⑩（S＝1/80）

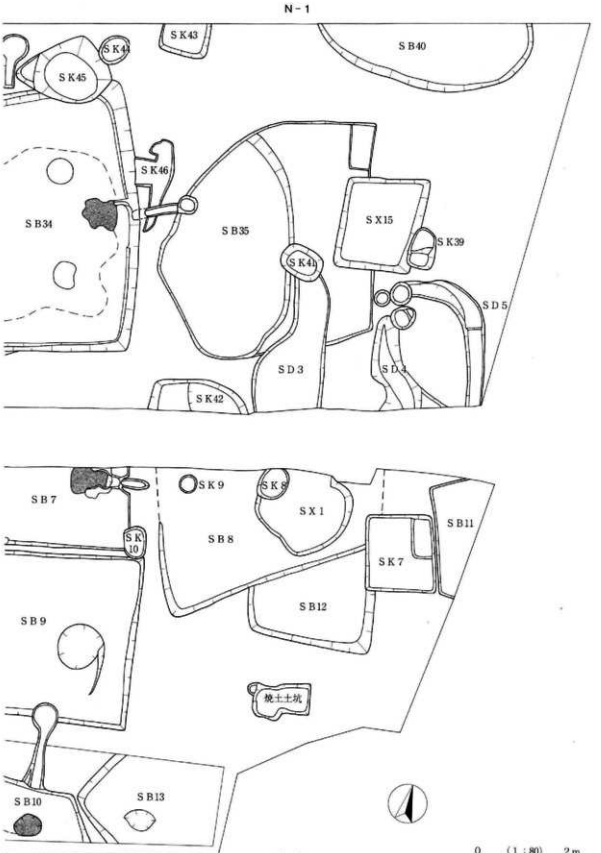


図127 Ⅵ区1次面遺構実測図① (S＝1/80)

S－2地点 SX08　一辺約2.2mを測る方形土坑である。覆土は暗褐色粘質土の単一層で、土器片が大量に出土している。

土器の出土状況は上下２図で示したが、これは調査期間の違いに起因する。上図は当初調査成果で、遺物取り上げ後、西壁が広がることが確認された。長野オリンピック開催による調査中断期間直前であったため、一時埋め戻し、翌春、再調査を行った結果が下図である。

遺物は確認面付近での出土は極めて少なく、確認面下30cmほどより出土し始め、底部まで累々と集積されていた。隣接する土器には同一個体とみられる破片が多く観察された。完形で出土した土器は１点のみで、ほぼすべてが破片と化している。また、土器片中には拳大から頭大の石が顕著に混じっていた。この石はいずれも加工痕のない自然石であった。土坑底部は平坦でなんら施設等は認められない。

土器の出土状況や接合状況からは細片化後に投棄された可能性は低いとみられる。特に小型器種の復元率は高く、石材を合わせて考えると、土坑内で石材の投げ込み等によって細片化した可能性が想起される。また、土器片は各破片が接していて間層はみられず、一時期に投棄された一括遺物と把握することができると考えられる。

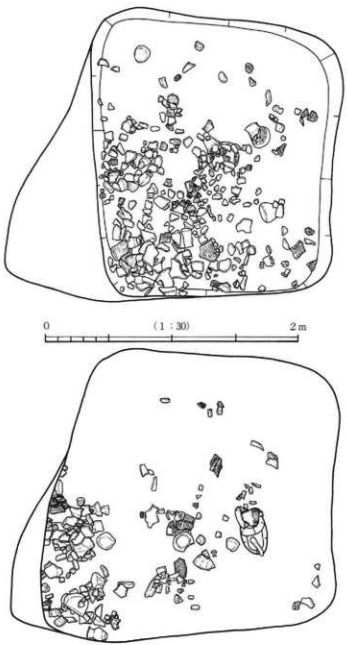


図128　SX08遺物出土状況実測図（S＝1/30）

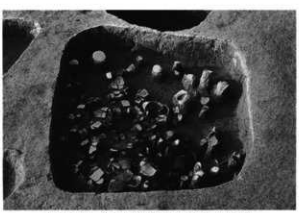


写真128　ＳＸ08遺物出土状況（上図）

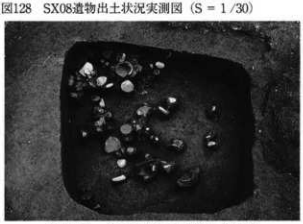


写真129　ＳＸ08遺物出土状況（下図）

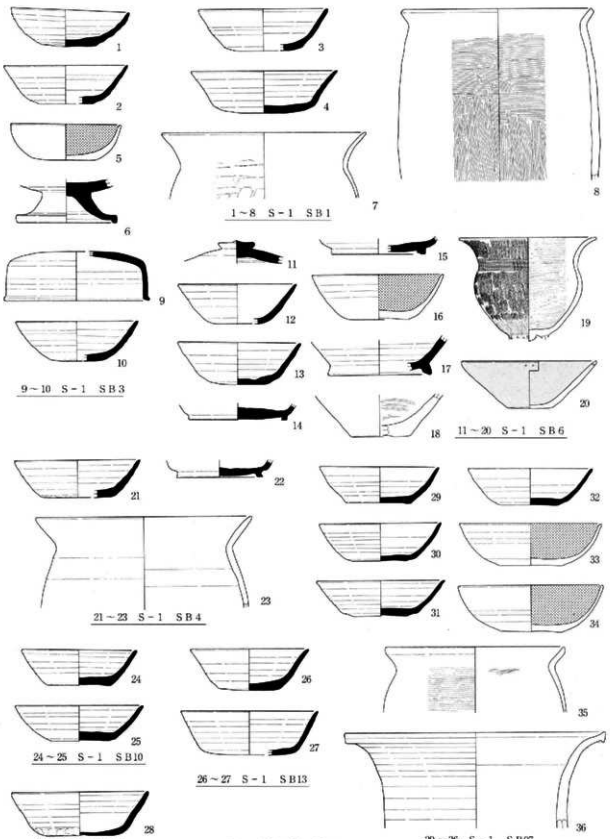


図129 Ⅵ区１次面出土土器実測図①（S＝1／4）

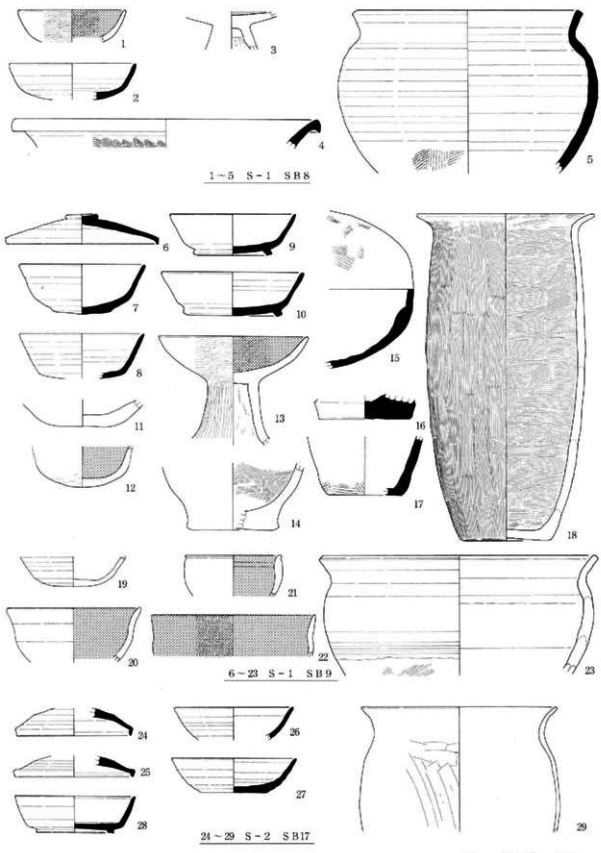


図130 Ⅵ区1次面出土土器実測図②（S＝1／4）

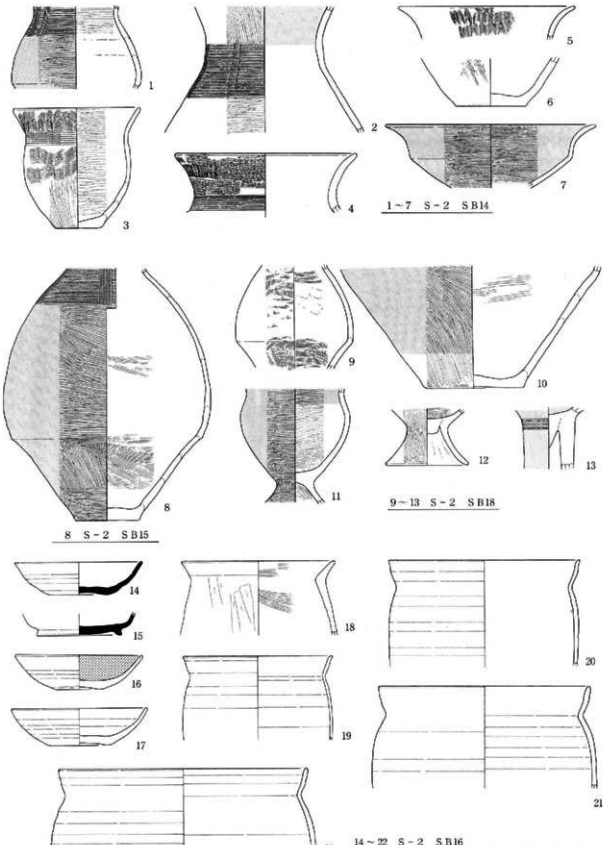


図131 Ⅵ区1次面出土土器実測図③ (S＝1／4)

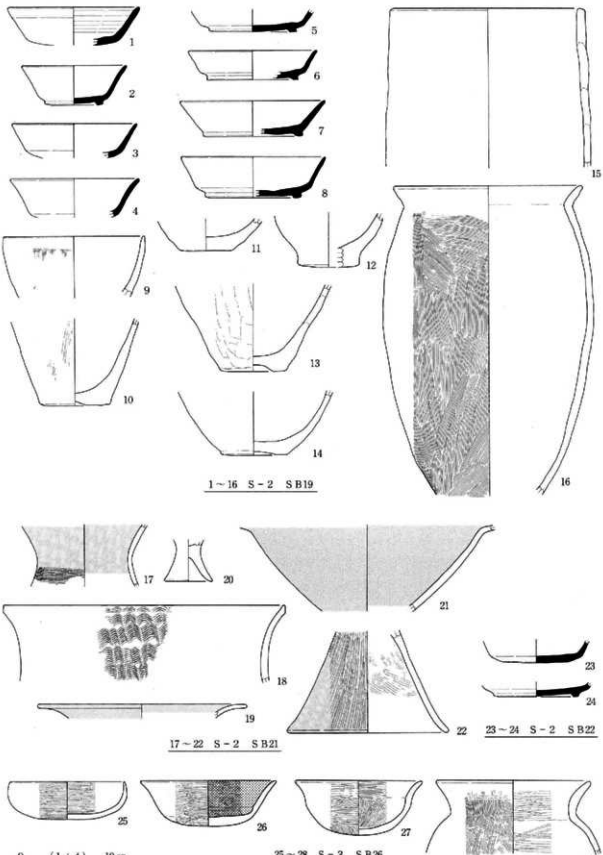


図132 Ⅵ区1次面出土土器実測図④ (S＝1／4)

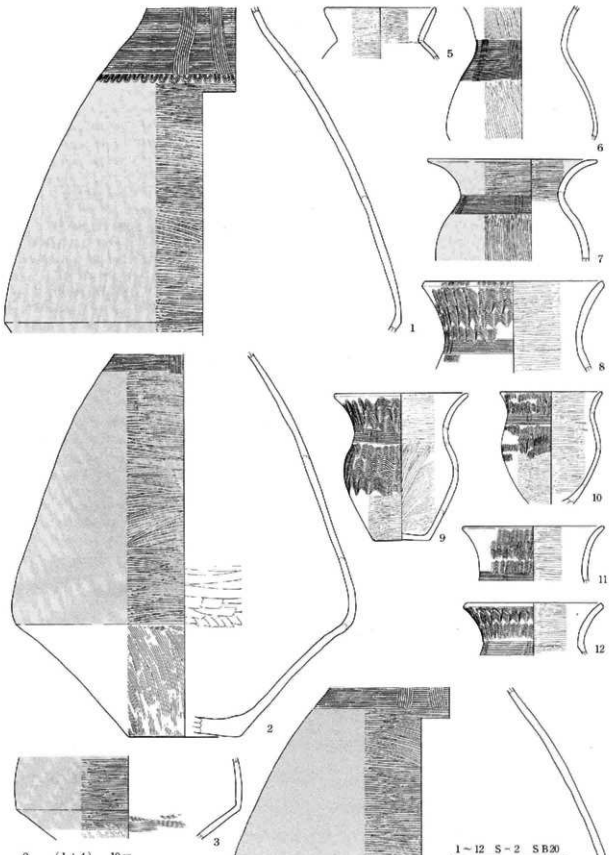


図133 Ⅵ区1次面出土土器実測図⑤ (S = 1/4)

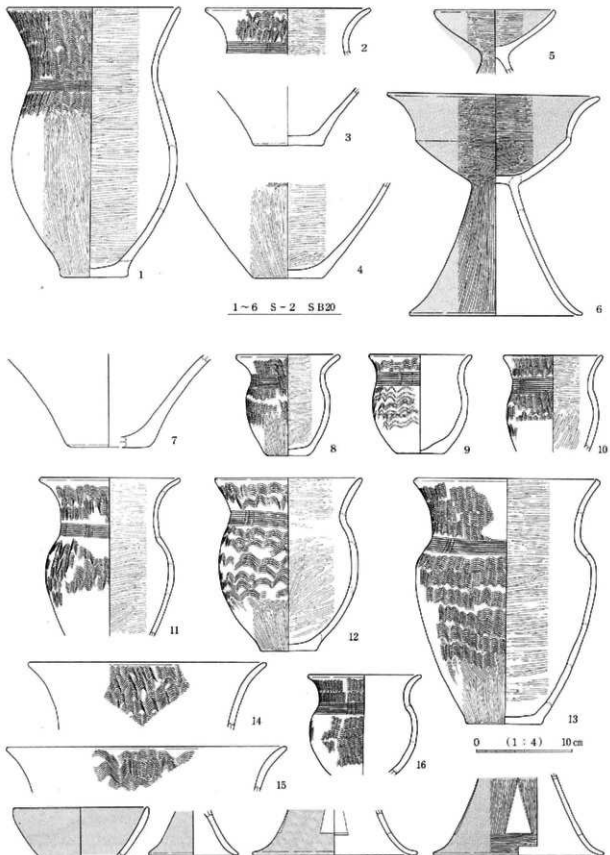


図134 Ⅵ区1次面出土土器実測図⑥ (S＝1／4)

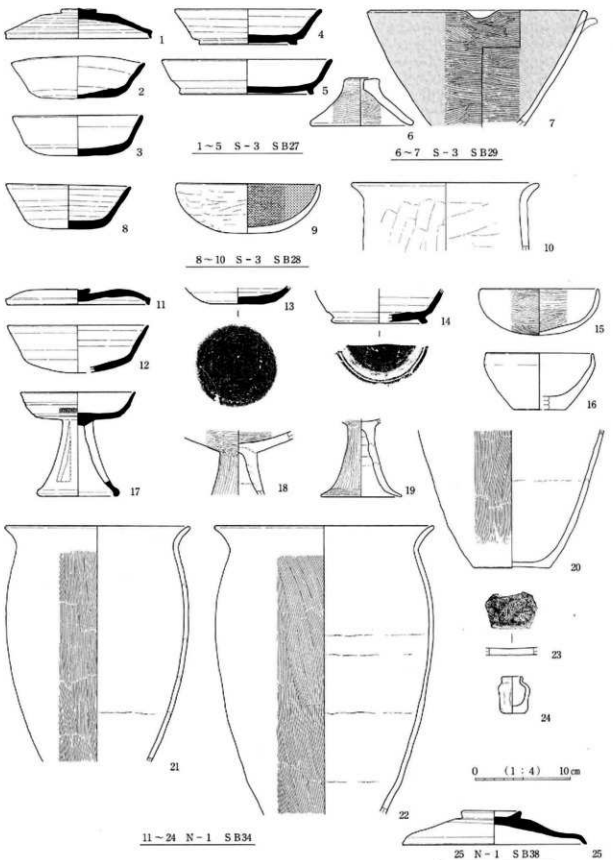


図135　Ⅵ区１次面出土土器実測図⑦（S＝1／4）

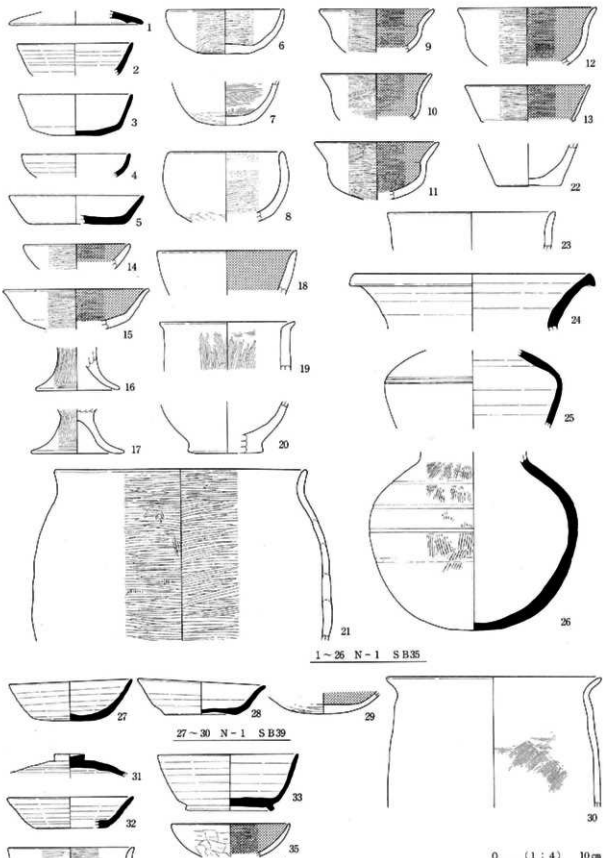


図136 Ⅵ区1次面出土土器実測図⑧（S＝1／4）

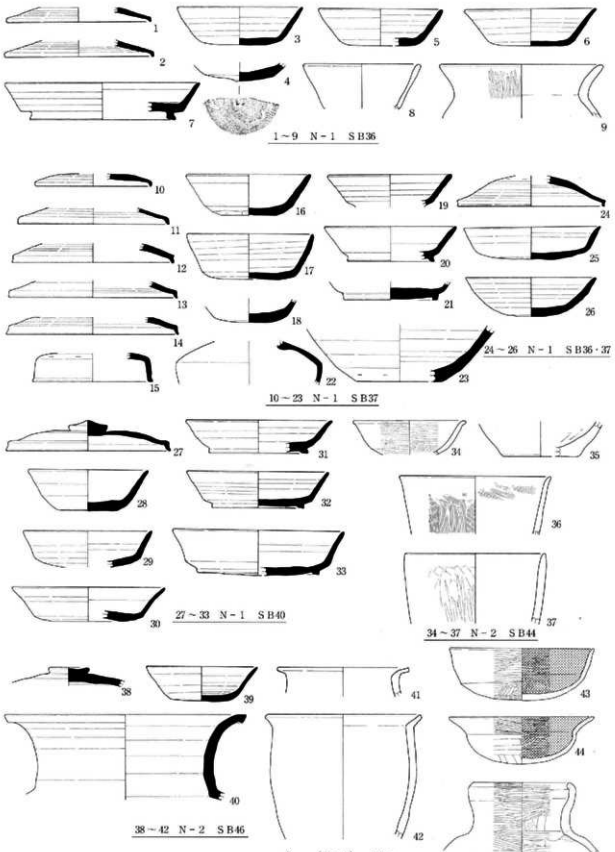


図137　Ⅵ区１次面出土土器実測図⑨（S＝１／４）

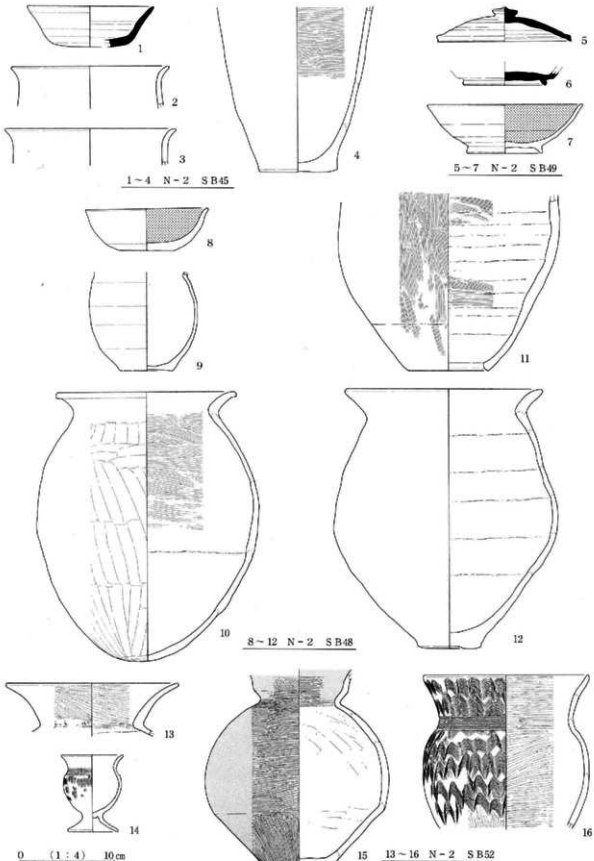


図138 Ⅵ区１次面出土土器実測図⑩（S＝1／4）

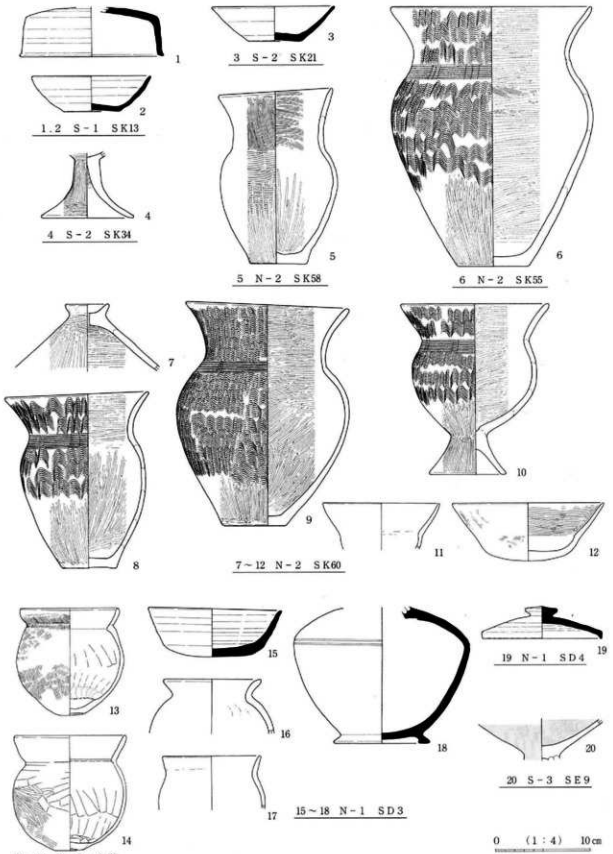


図139 Ⅵ区1次面出土土器実測図⑪ (S=1/4)

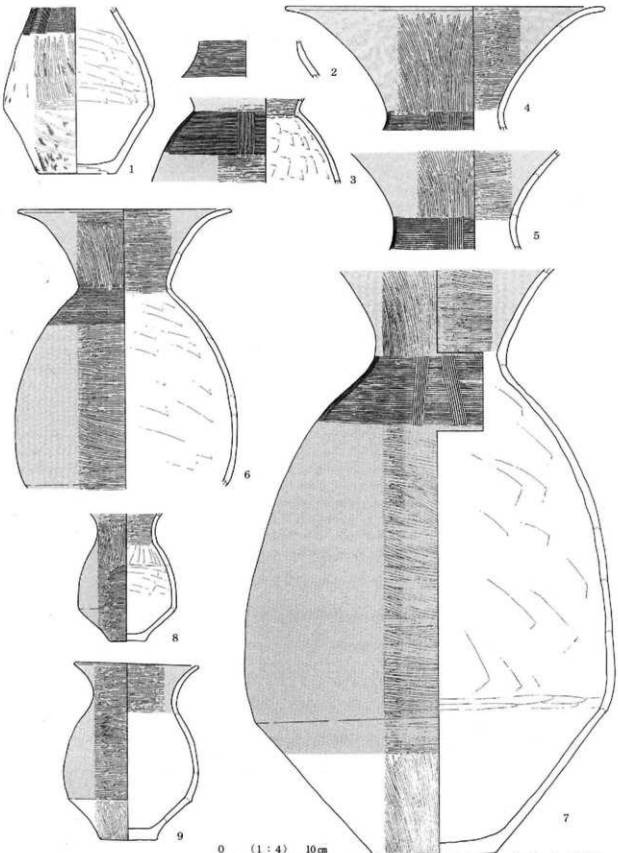


図140 Ⅵ区1次面出土土器実測図㉒ (S=1/4)

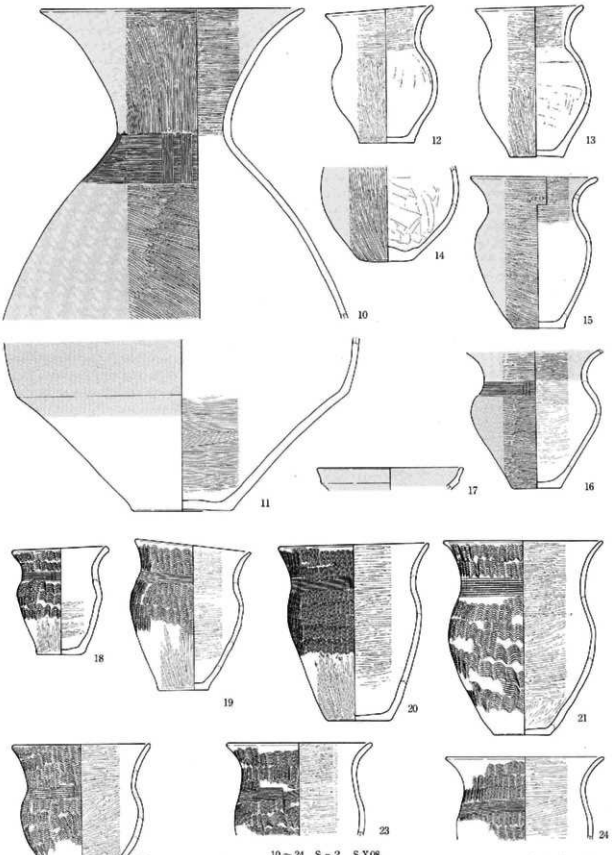


図141　Ⅵ区１次面出土土器実測図⑬（S＝１／４）

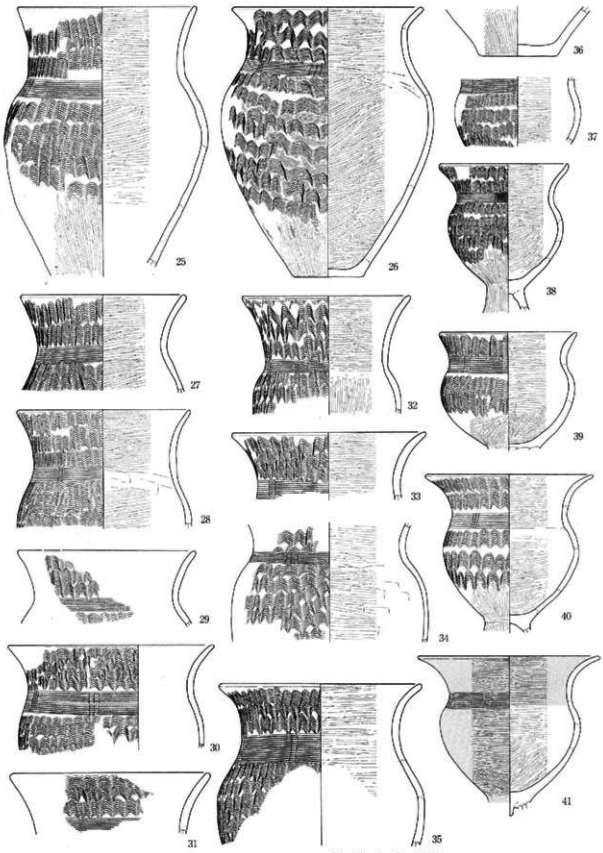


図142 Ⅵ区1次面出土土器実測図⑭ (S＝1／4)

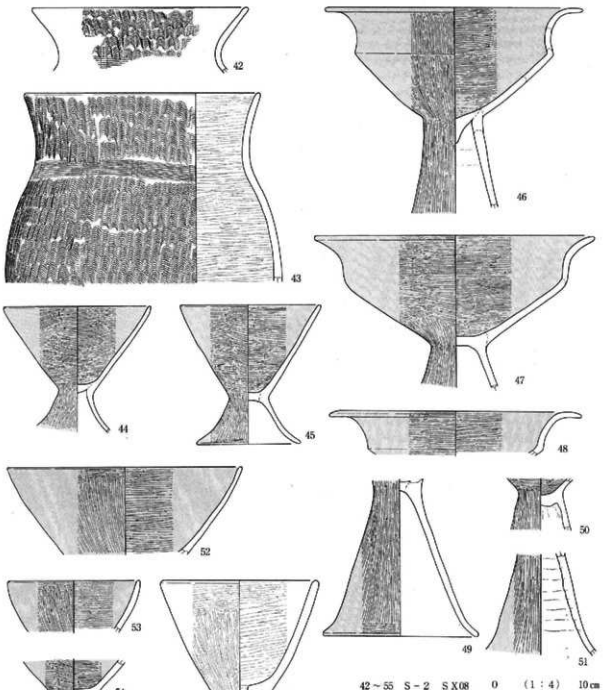


図143 Ⅵ区１次面出土土器実測図⑮（S＝1／4）

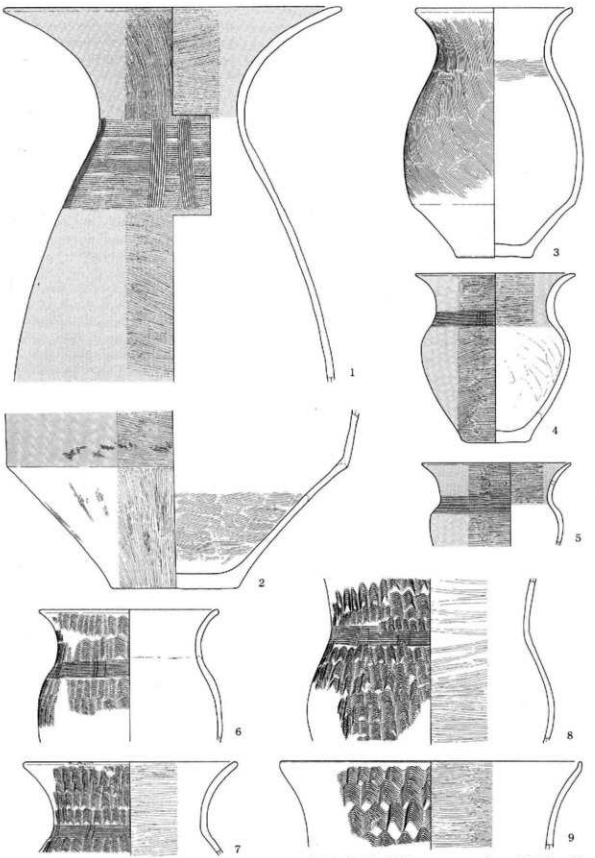


図144　Ⅵ区１次面出土土器実測図㊾（S＝1／4）

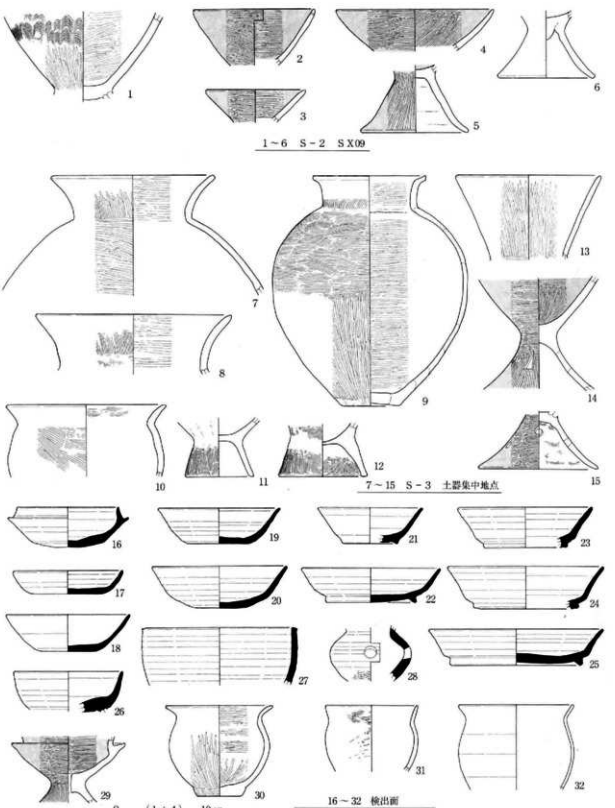


図145　Ⅵ区１次面出土土器実測図⑰（S＝1／4）

2　2次面・3次面の調査

弥生時代後期から古墳時代前期を主体とした遺構調査面である。1次面検出遺構下に存在する古墳時代後期～奈良時代遺構の調査も合わせて実施している。また、S-3地点では2次面で確認された方形周溝墓群のプランが不明瞭であったことから3次面の調査を実施している。3次面では周溝墓群のプラン確定とともに弥生時代後期の土器棺が1基検出されている。各地点で弥生時代後期を主体とした遺構が確認され、調査区全面に展開する。V区以東では極めて希薄であったが、新幹線地点を合わせて遺構密集度は非常に高い。なお、前記したようにS-2地点1次面で確認された弥生時代遺構を含めて扱う。

古墳時代前期　竪穴住居1（N-2区SB25）、方形周溝墓1（S-3区SDZ01）、土坑3、井戸1、土器集中（S-3区1次面土器集中）が該当する。いずれも調査区西側にのみみられ、分布範囲は限定される。SDZ01は最も西側で検出された周溝墓である。SDZ02と同一周溝と判断したSD03を掘り込んで重複する。周溝は北西－南東方向で、他の周溝墓と方向を揃える。調査区西壁付近では西へ緩やかに屈曲して周溝幅を増すことから、あるいは前方後方形になる可能性も想起される。周溝内からは壺・甕・器台・甑等の土器群が出土している。設置された状況は認められないが、比較的形態をよく残し、量も多い点で他の周溝墓と異なる。

弥生時代後期　調査区西側で方形周溝墓群、他で住居群が確認され、居住域と墓域の区分が把握される。

方形周溝墓群はS-3地点およびN-2地点西側で確認され、西側のⅦ区では認められないことから南側へ展開することが予測される。墳丘が確認された周溝墓はなく、いずれも浅い周溝が検出されたにすぎない。S-3地点SDZ02は周溝内法で8×5.5m程度を測る長方形を呈し、南側にブリッジを持つ。東側に並列するSDZ03はSDZ02とほぼ同規模と想定されるが、N-2地点では周溝の続きが検出されていない。周溝の続きが予想された位置では細い溝が方形に巡るSDZ07・08が検出された。幅0.4m程度の溝が方形に巡り、SDZ08は東側で溝の途切れが認められる。小型周溝墓の可能性も考慮したが、墳丘や埋葬施設の存在などは認められず、性格を断定するには至っていない。なお、SDZ07・08の調査後、SDZ03の周溝を探したが検出されず、北側に周溝が巡らないことが確実視される。SDZ03の南側に位置するSDZ05・06は部分的な検出で、形態および覆土より周溝墓の可能性を想定している。

竪穴住居は20軒程度が検出され、北西－南東に主軸をもつものが主体をなし、北東－南西に主軸をもつものも4軒確認された。隣接する北陳新幹線地点と主軸方向やその多寡は合致し、Ⅴ区SB17を含めて、一連の集落域と把握できる。規模は6×4m程度の隅丸長方形が一般的とみられるが、N-2地点SB22は8.8×4.5mを測る大型住居である。N-1地点SB15は柱穴・炉などが不明であるが、幅6.0m、長さ6.0m以上を測り、さらに大きくなる可能性が高い。貼床はSB02・SB14で確認され、他は硬化面で炉が検出されている。SB02・SB16・SB22では床面上に焼土・炭の散布が認められる。遺物は全体的に少なく、床面上に土器群が散乱する状況はみられなかった。このほか溝・土坑が少量検出されている。

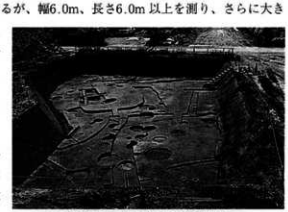


写真130 S-3地点3次面全景

N-2地点では遺構形態が判然としない部分から多量の土器群が出土した土器集中が確認されている。N-2地点ではSD06の東西両側に土器集中が認められた。西側のSX30は不整形土坑内より、東側のSX31は複数の土坑とその周辺より

土器群が出土している。弥生時代後期箱清水式古相を主体し、本来一連の形成過程を経た可能性が考えられる。ただし、東側のSX31には新しい段階の土器が含まれ、土器集中の形成が複数の時期に渡っている可能性が高い。N-2区SX08は方形土坑内より多量の土器が出土した土器廃棄坑である。また、SX08の西側、SB16－20間からも多量の土器が出土しており（SX09）、同様の性格が想起される。

さて、これら土器集中や土器廃棄坑は隣接した狭い範囲より検出されている。さらに、N-2地点SB16とSB20間に設定したトレンチからは掘り込みを伴わずに土器小片が少なからず認められ、局所的集中度はさらに高い可能性が考えられる。また、土器集中や土器廃棄坑の周辺より検出された竪穴住居（S-2地点1次面SB14・15・18・20・21）はSB23を除き、いずれも貼床・柱穴・炉などが検出されていなく、N・S-1地点等の竪穴住居の確認状況と異なる。この違いを重視してそれらの遺構群を一般住居とは異なると仮定すると、土器集中地点の局所的集中は新幹線地点を含めた東側の居住域と西側の墓域の間にちょうど位置することとなり、鮮やかな対比をみせる。居住域と墓域を画する空白域に土器集中が継続的に形成された可能性も考えられよう。

地点名	遺構名	時代	重複関係		床（底）面		付属施設	特記事項	備考	遺物図版番号	土器観察番号	写真番号
			先	後	柱穴							
S-3	SD201	弥生～古墳	SD202		平坦			調査時遺構番号SD02	方形周溝墓か	146	165	135
S-3	SD202	弥生後期か		SD04	浅く平坦			SD03と同一遺構と判断	方形周溝墓か	146		146
S-3	SD03	弥生後期		SD04	浅く平坦			SD202と同一遺構と判断		146	166	
S-3	SD04	古墳前期	SD202 SD03		浅く平坦			当初周溝墓の可能性を想定して調査を行ったが、覆土は締まりの強い暗褐色度でSD201・SD202と異なり、ほとんど遺物を含んでいないことから周溝墓の可能性低いと判断した。		146		
S-3	SB26	弥生後期		SD201 SD04	鞍部 2？	炉 周囲に炭散布		炉周辺の小ピットは当住居に伴うか	遺構プランは把握されず	146		
S-3	SB27	弥生後期		SD03	鞍部 なし	炉		炉跡のみ確認	遺構プランは把握されず	146		
S-3	SK25	古墳前期か								146	164	
S-3	SX02	弥生後期		SD03						146	171	
N-2	SB25	弥生～古墳		SD08 SB24	硬化面 1	北側に炭散布 （炉跡は確認されず）				147	162	
N-2	SB08	古墳後期	SB25		（未完掘）	竪穴				147	166	
N-2	SD207	弥生後期か	SD208					周溝状の落は緩く浅い	方形周溝墓の可能性は低い	148		141
N-2	SD208	弥生後期か		SD207				周溝状の落は緩く浅い	方形周溝墓の可能性は低い	148		141
S-3	SD203	弥生後期			浅く平坦			N-2地点では周溝の続きが検出されなかった。		148	171	147
S-3	SD205	弥生後期		SB10 SB06	浅く平坦					148	171	
S-3	SD206	弥生後 ～古墳		SX01					部分的な検出で詳細不明	148		
S-3	SK15	古墳前期								148	164	
S-3	SX01	古墳前期	SD206							148	166	
S-2	SB26	古墳前期		SB10	（未完掘）	竪穴			SB10東側にて検出	148	171	
N-2	SB22	弥生後期			硬化面 3	炉		床面上に焼土・炭・高化材分布	S地点ではSB11により破壊され、検出されなかった	149	165	136

地点名	遺構名	時代	重複関係		床（壁）面	付属施設	特記事項	備考	遺構図版番号	土器図版番号	写真番号
			先	後	柱穴						
S-3	SB11	不明			硬化面 なし		N地点では1次面SB46・50直下でSB22が検出されたため、すでに破壊されたと判断される		149		
S-3	SK16	古墳前期		SB11					149	171	
S-3	1号土器棺	弥生後期					SDZ03周溝西側隣接地で検出したが、表土掘削作業中のため、位置情報欠落		158	169	132
N-2	SX30	弥生後期			平坦　脆弱		不整形土坑内より土器・土製勾玉出土	西側土器集中地点として調査実施	149	166 167	137 138
N-2	SD06	平安					1次面N地点SD10・11直下で検出された溝跡で、SD11と同一遺構と判断される		149	166	
N-2	SB23	弥生後期		SD06	硬化面 未検出		床面上で焼土・炭確認	S-2地点1次面SB23と同一遺構	150	162	
N-2	SX31	弥生後期					広範囲に掘方を伴わず土器片が出土	東側土器集中地点として調査実施	150	167 168 169	137 139
N-2	SB20	古墳後期		1次面 SB48・49	貼床 4	カマド残欠（北壁）	床面上より土器群が出土	覆土出土土器の大半は1次面SB48に伴うと考えられる	151 157	163 164	131
N-2	SB21	弥生後期			脆弱 なし		調査区南壁際より斜立した甕1点出土。掘り込みはなく、また、蓋が認められないことから土器棺の可能性は低い		151 152	162	140
S-1	SB06	弥生後期		SE03	脆弱 未確認			竪穴住居であるかどうか不明	153	159	
S-1	SB07	弥生後期			貼床 未確認				153	159	
S-1	SK09	弥生後期か							153	164	
S-1	SD01	弥生後期							153	164	
N-1	SB18	弥生後期			脆弱 3		1次面SB37下より検出	奈良時代遺物は1次面SB37に帰属すると判断される	154	162	
N-1	SB15	弥生後期	SB16	SB14 Sk20	脆弱 未確認		北陸系土器出土	須恵器は1次面SB34に帰属	154	161	
N-1	SB34	弥生後期	SB15				2次面調査時に1次面SB34床面直下で土器が一定量出土。SB34として取り上げるが、SB15に帰属する可能性が高い			162	
N-1	SB16	弥生後期		SB15	硬化面 1	炉 床面上に炭散布			154	161	
S-1	SB04	弥生後期	SB08	SB03	硬化面 2	炉など未検出	床面上より土器群出土		153 154		145
S-1	SB03	弥生後期	SB04 SB08		硬化面 3	炉			154		
S-1	SB05	弥生後期	SB08		硬化面 なし				154	159	
S-1	SB08	弥生後期		SB03・04 SB08	硬化面 6	炉 中央部に炉の痕跡	床面上より多量の炭化材・焼土検出	SB05下より検出	155	159	144
N-1	SB14	弥生後期	SB15		貼床 未検出		北陸系土器出土		156	161	
N-1	SE07	古墳後期	SB13・14		平坦　脆弱 なし			井戸跡として調査したが、方形土坑と考えられる	156	166	
N-1	SB12	奈良			硬化面 なし	土坑状の掘り込み2基	南西側土坑内より焼土・炭検出	一般住居跡とは考えがたい	156	161	
S-1	SB02	弥生後期			貼床 なし	炉 炉東側に土坑	床面は2面で、ともに貼床ならびに焼土・炭の散布を確認した。炭化材は下層床面で顕著にみられた。		156	159	143
S-1	Pit01	弥生後期					底部より土器出土		156		

表16　Ⅵ区２・３次面検出主要遺構一覧表

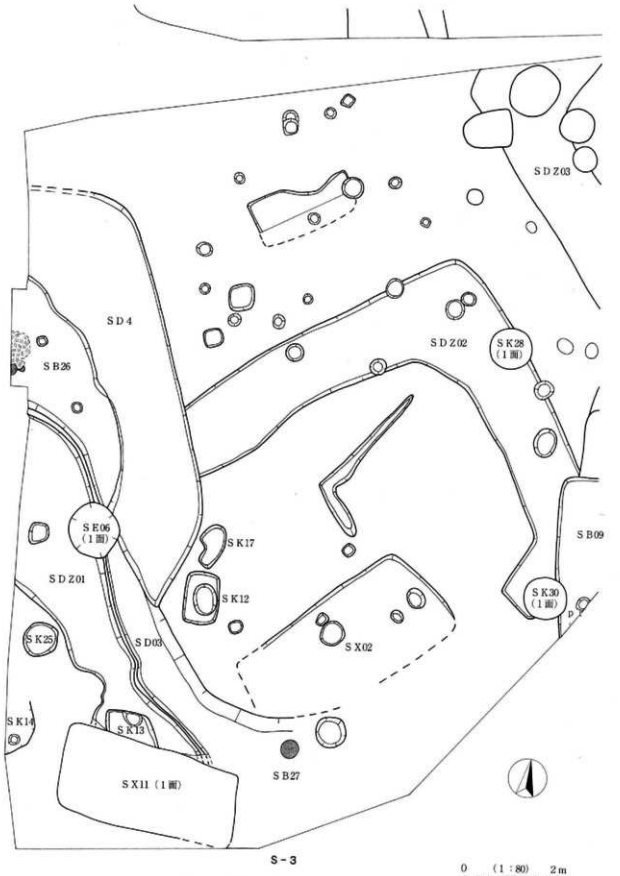


図146 Ⅵ区2次面遺構実測図① (S = 1/80)

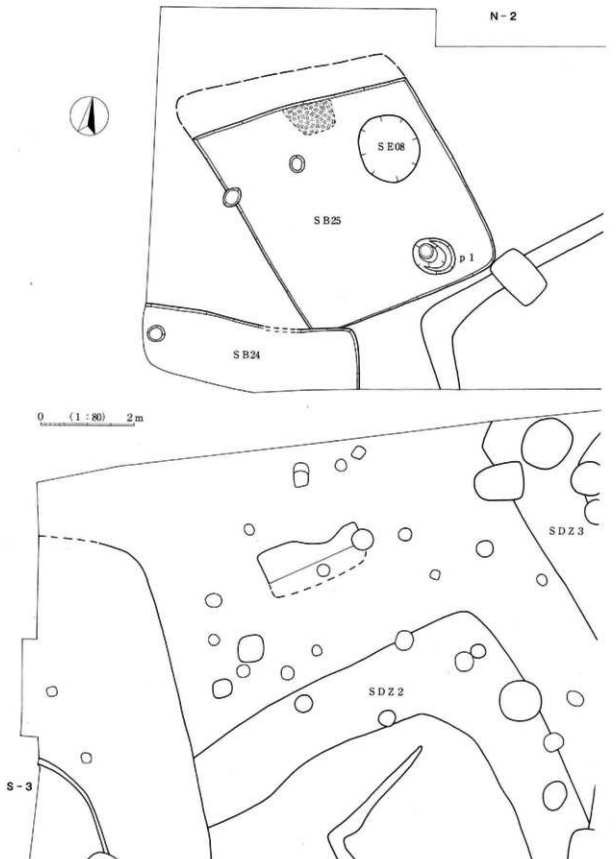


図147　Ⅵ区２次面遺構実測図②（S＝1/80）

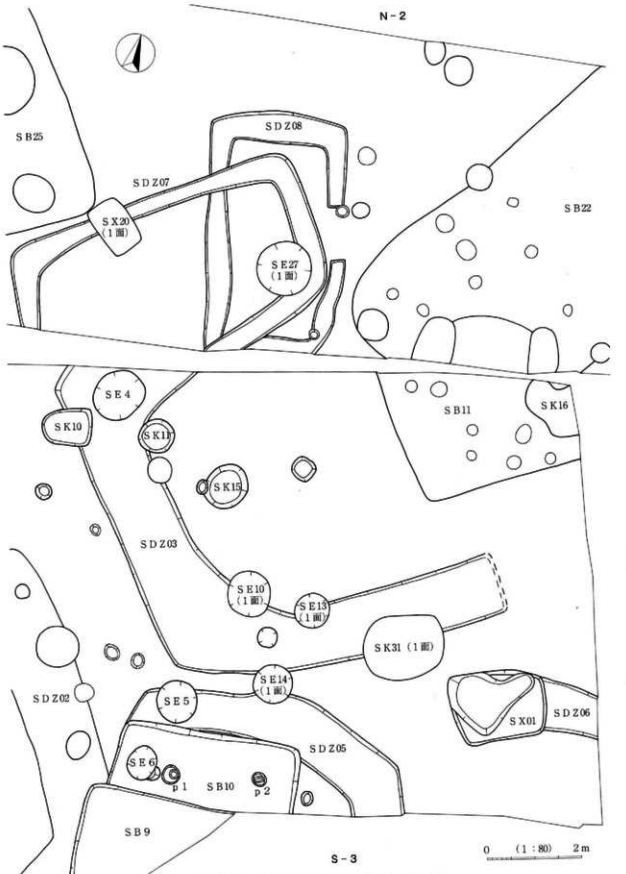


図148 Ⅵ区２次面遺構実測図③ (S＝1/80)

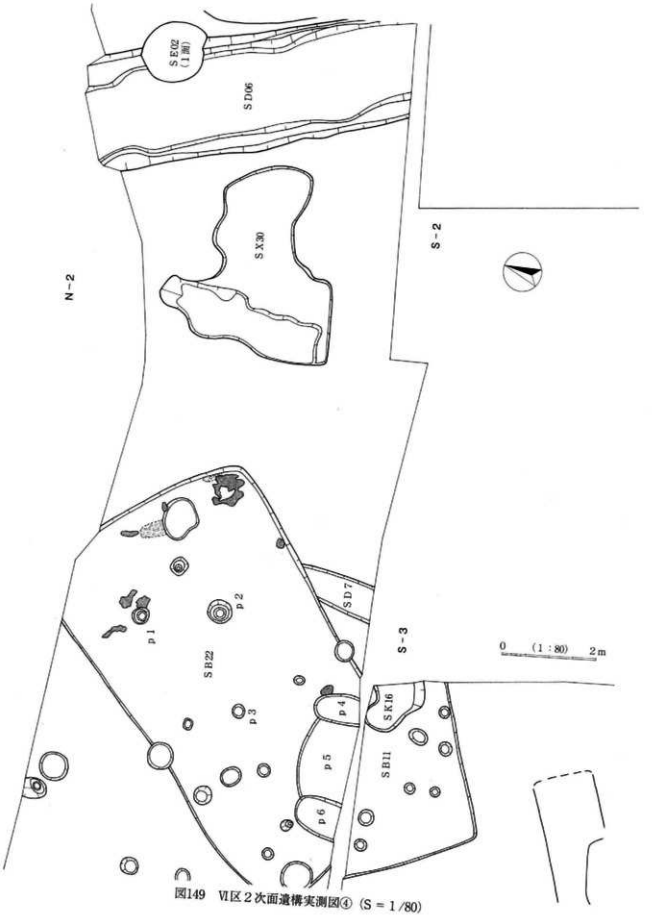


図149 Ⅵ区２次面遺構実測図④ (S = 1/80)

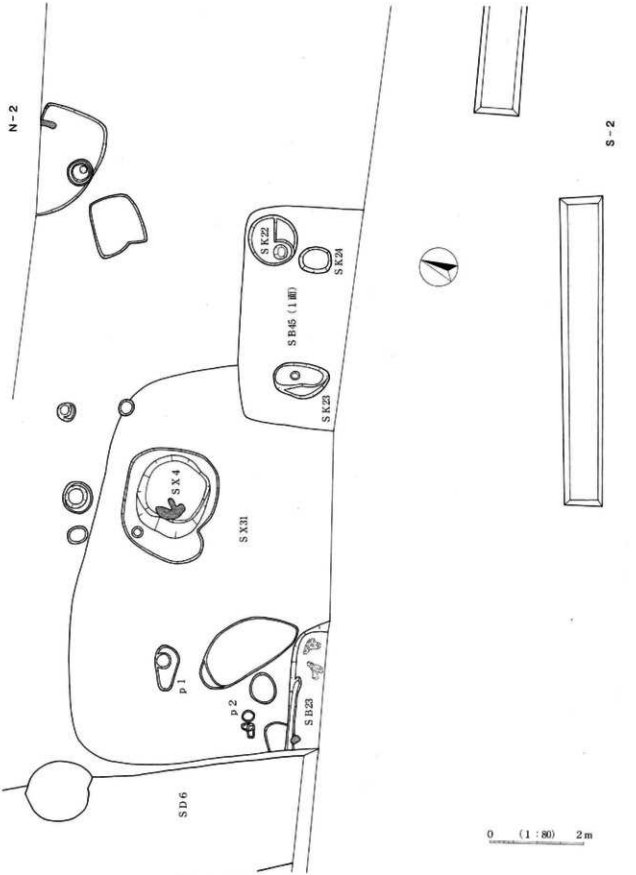


図150　Ⅵ区２次面遺構実測図⑤（S＝1/80）

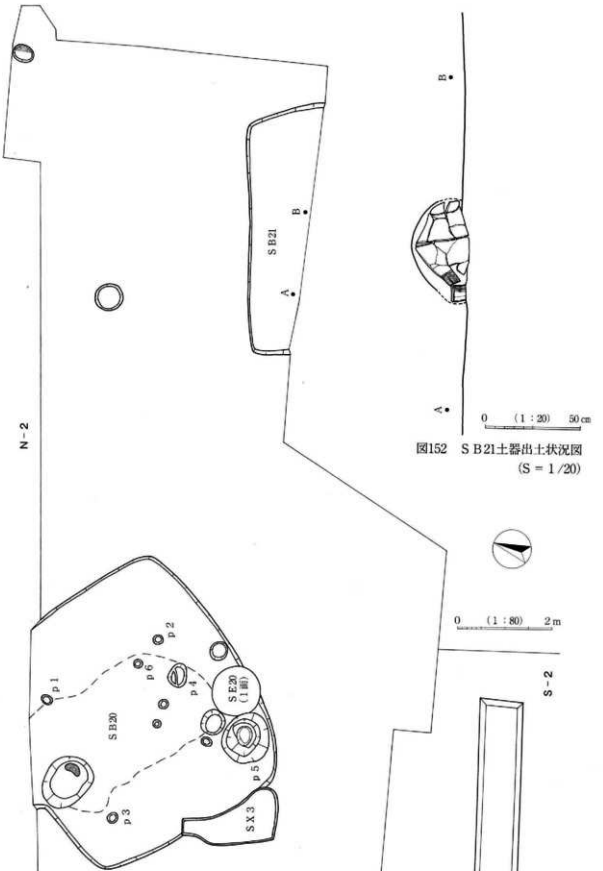


図152　SB21土器出土状況図
(S = 1/20)

図151　Ⅵ区2次面遺構実測図⑥ (S = 1/80)

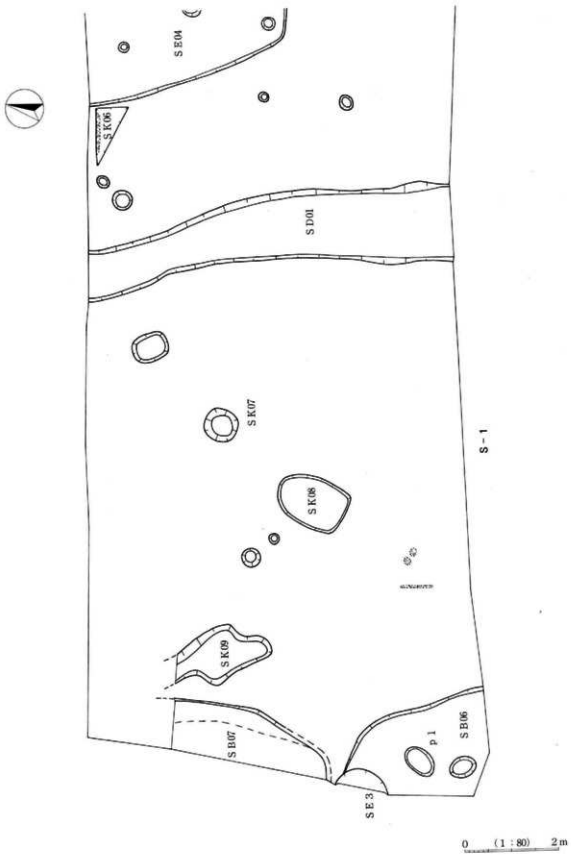


図153　Ⅵ区２次面遺構実測図⑦ (S = 1 /80)

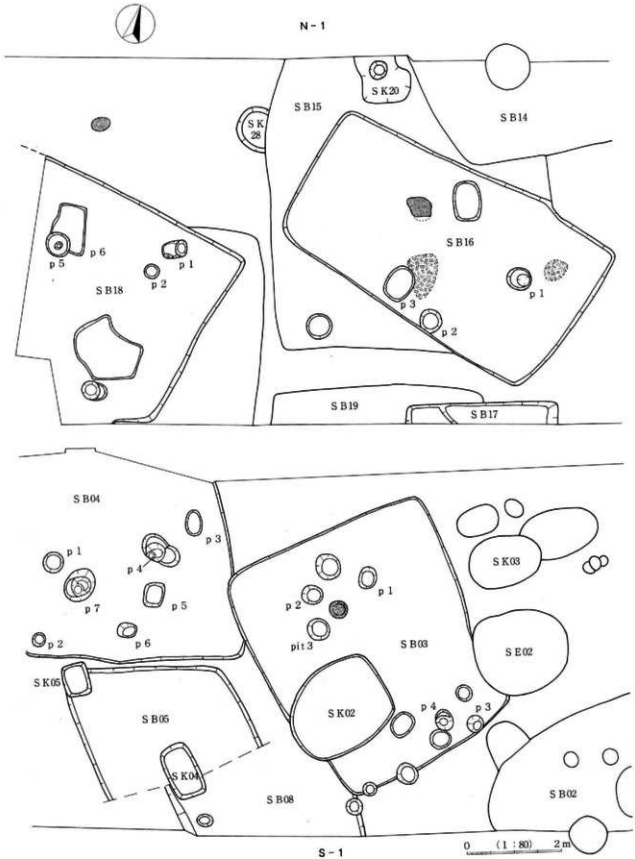


図154　Ⅵ区２次面遺構実測図⑧（S＝1/80）

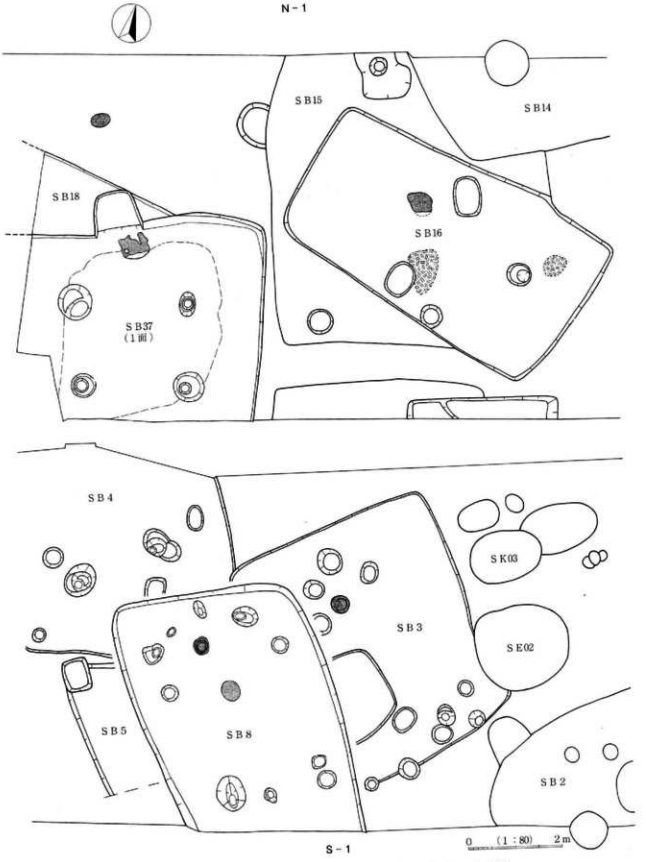


図155　Ⅵ区２次面遺構実測図⑨（S－1　SB08）（S＝1/80）

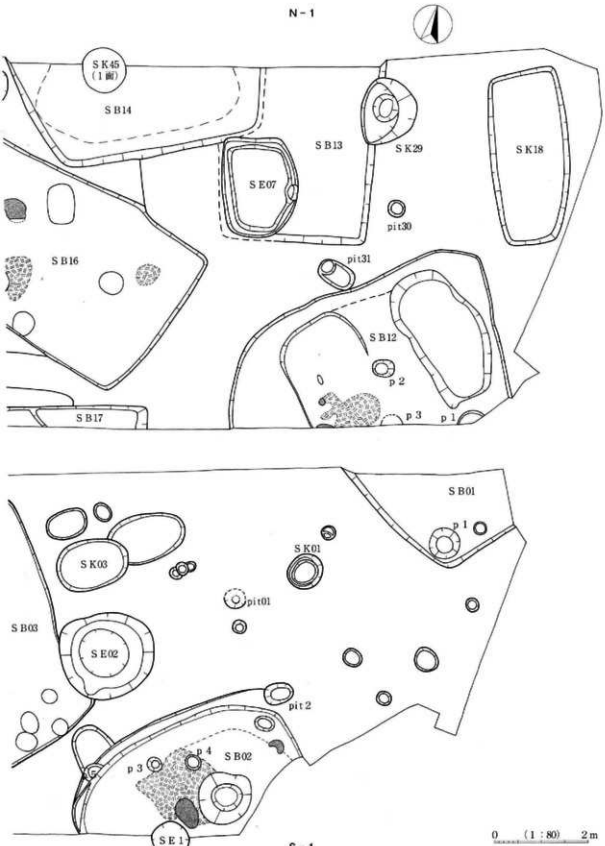


図156　Ⅵ区２次面遺構実測図⑩（S＝1/80）

N－2地点　SB20　一辺5.5mを測る隅丸方形の竪穴住居である。柱穴は貼床を囲むように4箇所認められる。北壁中央部にはカマドが作り付けられているが、既に破壊されており、痕跡が確認されたにすぎない。カマド想定範囲の土器群に混じって角石が検出されており、カマド構築材とみられる。遺物はカマド付近および貼床上より土師器が出土している。図163の床面出土とした土器群が主として該当し、番号が対応している。土器群は高杯を主体に壺・甕より構成され、該期に特徴的な小型丸底土器を含まない。また、床面直上より滑石製臼玉が1点出土しており、ドットで位置を明示している。

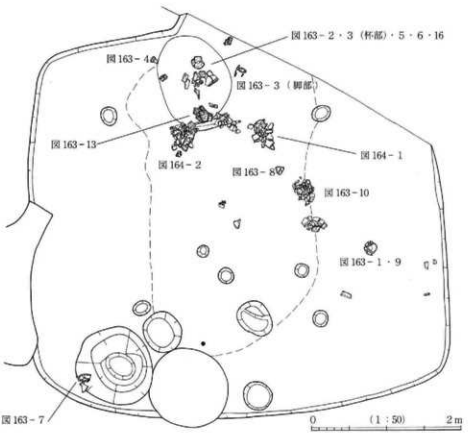


図157　N－2区SB20遺物出土状況実測図（S＝1/50）

1号土器棺　S－3区3次面の表土掘削作業中に確認された。2次面調査時には本棺の存在を示す痕跡は確認されなかった。また、周辺に同様な土器棺はなく、単独立地である。棺は甕1個体を斜めに埋設している。検出時には蓋はなかったが、棺内出土土器片により別個体の底部が復元されたことから、蓋に覆われていたと考えられる。棺内部は土が充満していたが、棺中央部に若干浮いた状態で板石が1点認められたのみで出土遺物はない。弥生時代後期で周溝墓群に先行するとみられる。

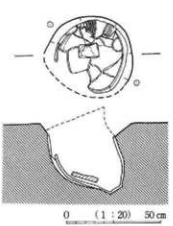


図158　1号土器棺検出状況実測図（S＝1/20）

写真131　SB20遺物出土状況

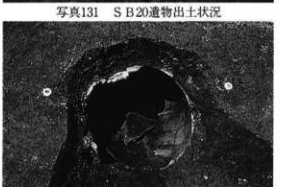


写真132　1号土器棺

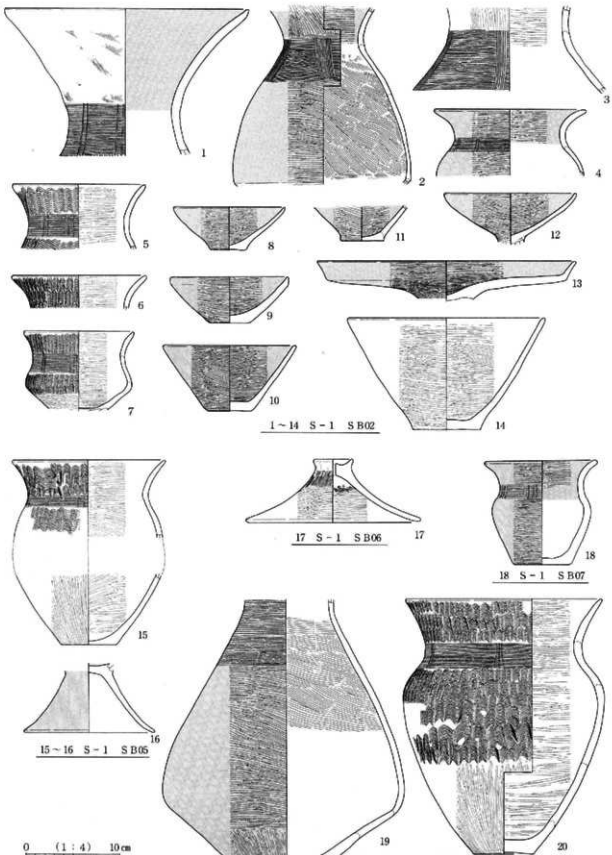


図159 Ⅵ区２次面出土土器実測図①（S＝1／4）

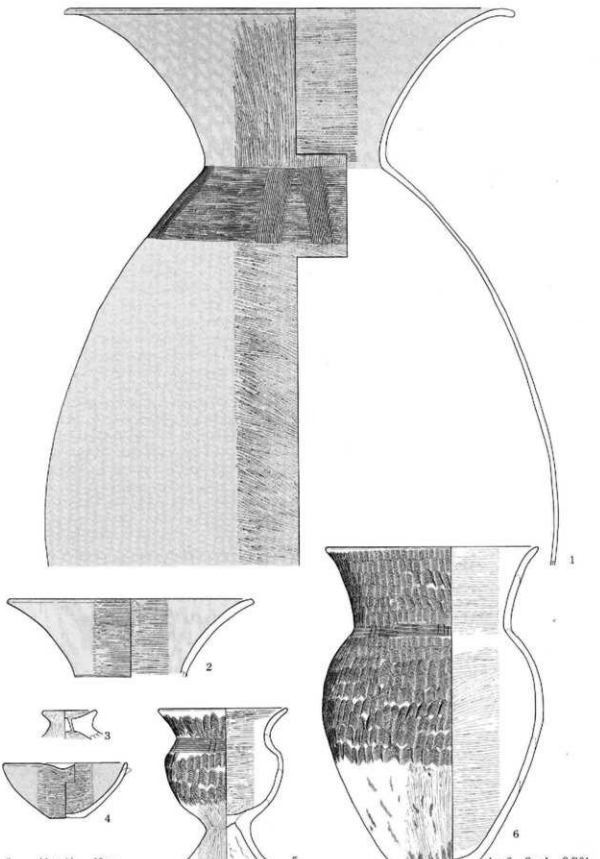


図160 Ⅵ区２次面出土土器実測図②（S＝1／4）

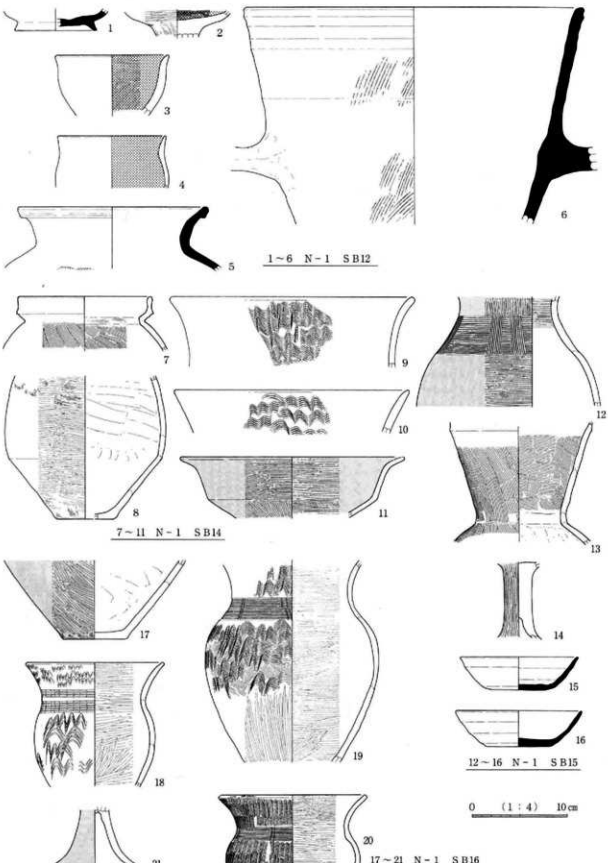


図161 Ⅵ区２次面出土土器実測図③（S＝1／4）

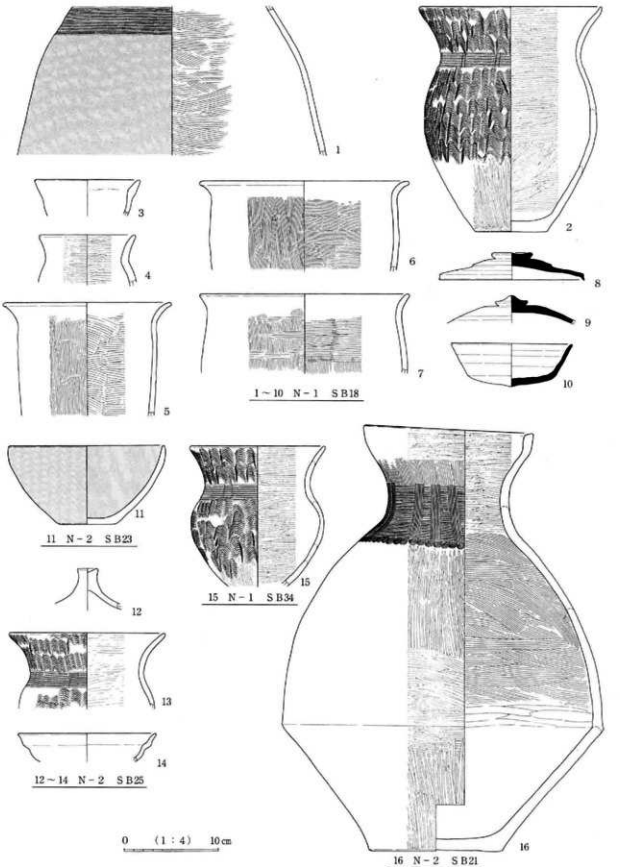


図162 Ⅵ区２次面出土土器実測図④ (S＝1／4)

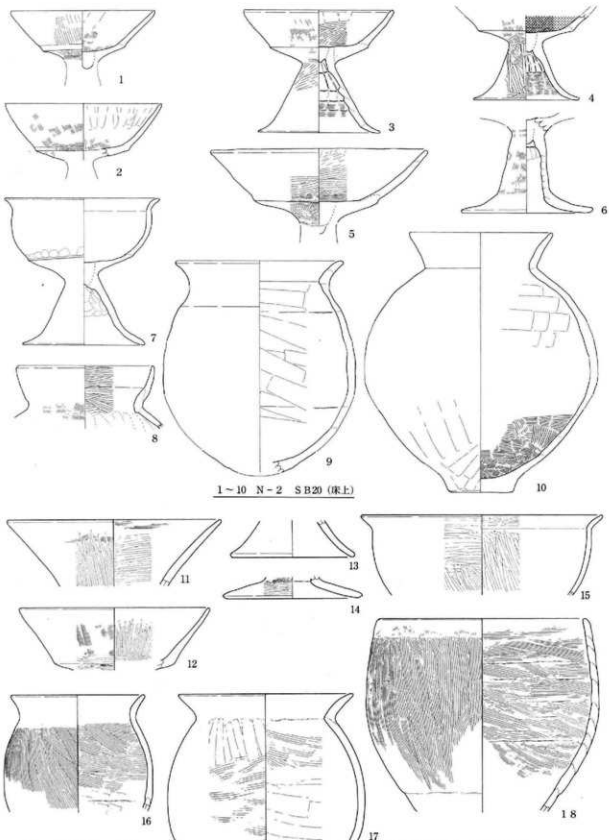


図163 Ⅵ区２次面出土土器実測図⑤ (S＝1／4)

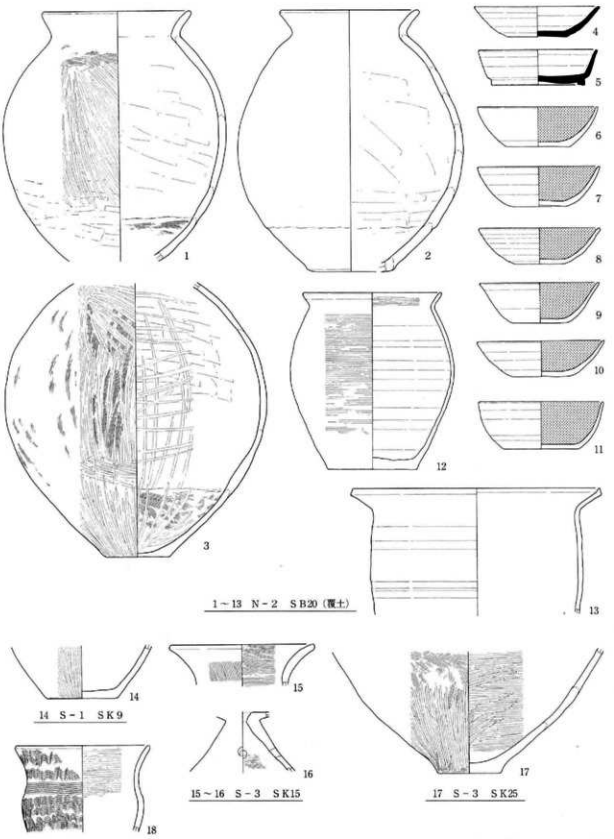


図164 Ⅵ区２次面出土土器実測図⑥（S＝1／4）

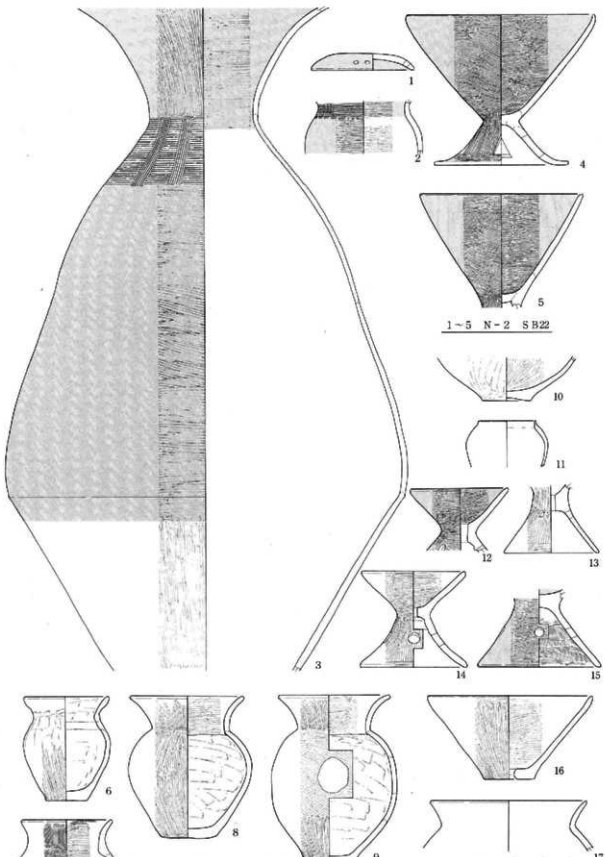


図165 Ⅵ区２次面出土土器実測図⑦ (S＝1／4)

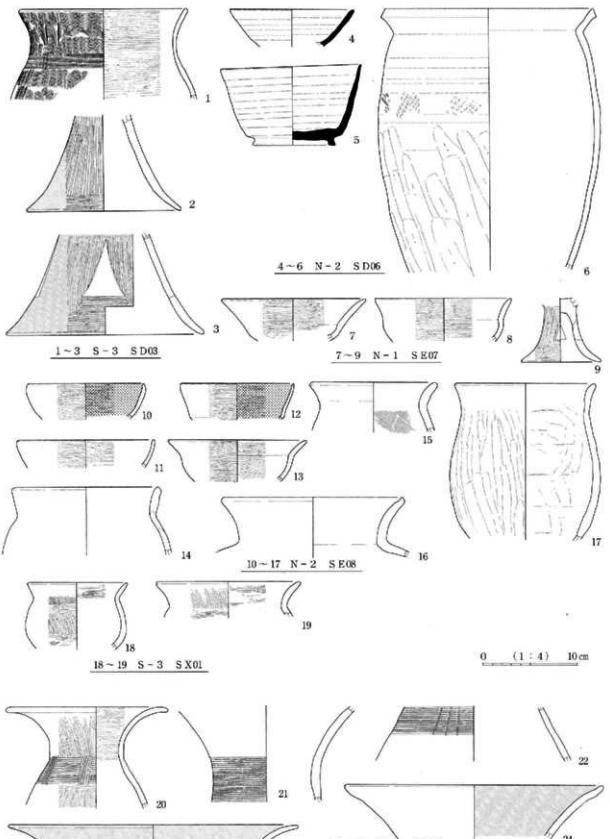


図166 Ⅵ区２次面出土土器実測図⑧（S＝1／4）

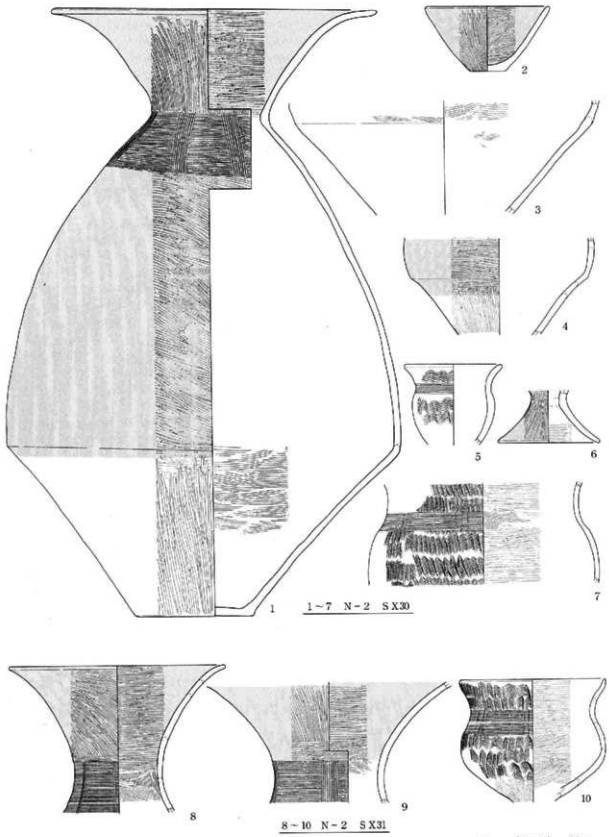


図167 Ⅵ区２次面出土土器実測図⑨ (S = 1 / 4)

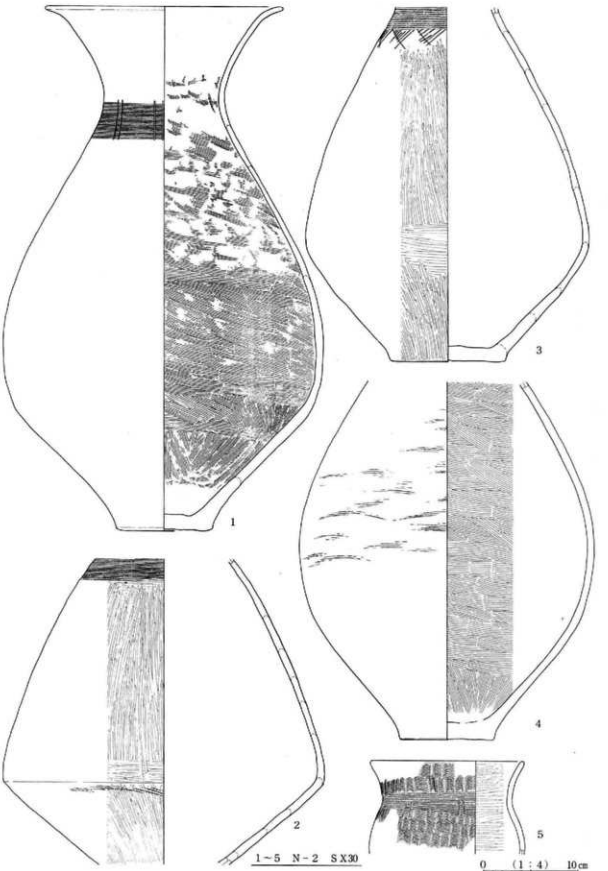


図168 Ⅵ区２次面出土土器実測図㉚（S＝1／4）

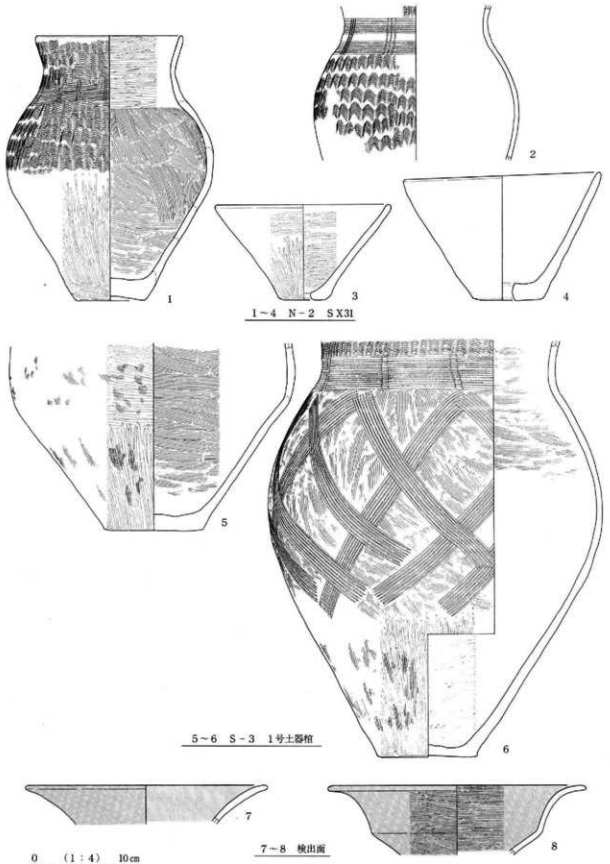


図169　Ⅵ区２次面出土土器実測図⑭（S＝1／4）

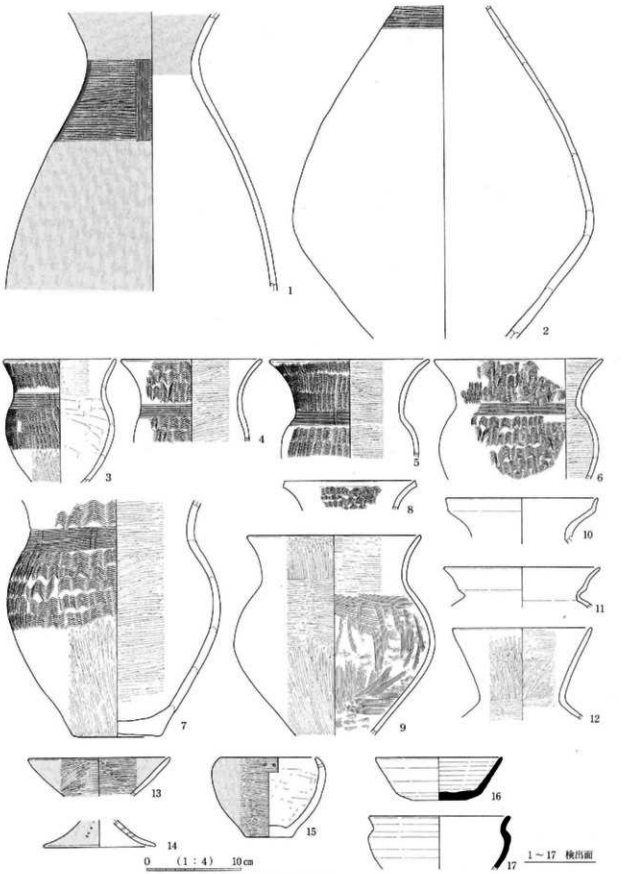


図170 Ⅵ区２次面出土土器実測図⑫（S＝1／4）

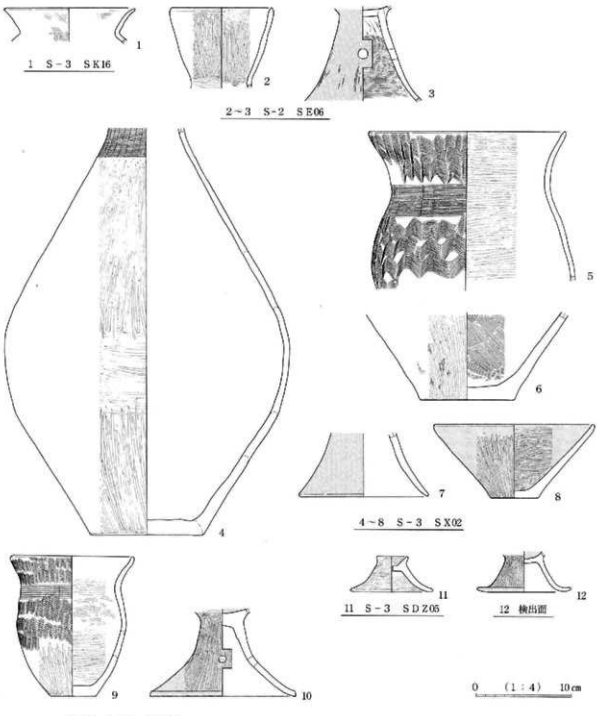


図171 VI区3次面出土土器実測図（S＝1／4）

写真133
N－１地点
２次面全景

写真134
N－２地点
ＳＢ22

写真135
S－３地点
ＳＤＺ01

写真136　N－２地点２次面全景

写真137　N－２地点土器集中

写真138　ＳＸ30（西側土器集中）

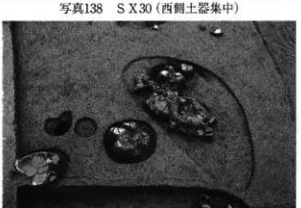


写真139　ＳＸ31（東側土器集中）

写真140　N－２地点ＳＢ21土器出土状況

写真141　N－２地点ＳＤＺ07・08

写真142　S－１地点２次面全景

写真143　S－１地点ＳＢ02下層床面検出状況

写真144　S－１地点ＳＢ08炭化物検出状況

写真145　S－１地点ＳＢ04

写真146　S－３地点ＳＤＺ02

写真147　S－３地点ＳＤ Z03

X　Ⅶ区の調査

Ⅶ区は北陸新幹線建設用工事道路により南北に２分（N・S区）し、隣接畑への出入口確保のためさらにそれぞれを３分割した都合６地点で発掘調査を実施した。N区は西から１・２・３地点、S区は１・３・２地点と調査実施順に地点名を呼称したため、南北に隣接する地区で細分割地点名が異なる点に注意が必要となる。発掘調査はそれぞれの地点で２次面の調査を実施している。Ⅵ区同様に時代に応じた面ではなく、連続する遺構群の把握のために設定した作業上の確認面である。

1　１次面の調査

古墳時代後期から平安時代の遺構群を主とする。また、これらの遺構を覆うように方形ピット群が確認されている。なお、遺構分布が希薄な部分では古墳時代前～中期の遺構が検出され、各時代の遺構が層位的に連続していることが明らかである。

方形ピット群　調査区東半部に当たるN-２・３地点、S-２・３地点では、南北方向に明確な列をなして調査区全面に展開する方形ピット群が検出された。西側のN-１・S-１地点では良好な状態でこそ確認されなかったが、遺構を掘り込んで分布が確認され、本来は同様に展開したとみられる。覆土はいずれも黄褐色砂質土の単一層で、遺物の出土はない。なお、方形ピット群を掘り込む遺構は確認されず、最も新しい時期の所産と考えられる。

写真148　S-３地点方形ピット群

中世　出土遺物より確実に中世に比定される遺構はないが、他地区同様に井戸が中世まで使用されていた可能性は高いと考えられる。

奈良時代から平安時代　平安時代はN-１・S-１地点で竪穴住居が２軒検出された。このほか、N-３・S-２地点で検出された土坑・溝も該期が多数を占めるとみられる。奈良時代はN・S-１地点、S-３地点ならびにN-２地点２次面で竪穴住居４軒ならびに溝１条ほかが検出されている。住居群は調査区西側（N-１・２、S-１・３地点）にのみみられ、ほとんど重複せずに分布する。Ⅵ区から新幹線地点にかけての該期集落中心域とは土坑群の分布域を挟んで一定の間隔を置き、遺構密度も圧倒的に低くなる。集落構造の一端をよく示す点で注目される。

古墳時代後期　奈良・平安時代住居群がみられるN・S-１地点を中心に各地区に竪穴住居・土坑が分布する。新幹線地点ほどの遺構密集度はみられないが、Ⅵ区を含めて面的な広がりをみせ、該期集落の一角を占める。カマドはいずれも北西方向を向き、主軸を揃える。この主軸方向は基本的に奈良・平安時代に継承されており、住居密集の位置を含めて、集落構造の骨骼が該期に形成された可能性が伺われる。

古墳時代中期　N-１・２地点では古墳時代中期の竪穴住居・土坑が検出された。１次面の主体をなす古墳時代後期以降の遺構が存在しない箇所に限られ、後出土坑群が分布するN-３地点では２次面にて確認されている。竪穴住居群はほとんどが重複関係を有し、極めて狭い範囲に密集している。また、N-２地点では土器群が設置された土坑（SK58）が１基検出された。方形土坑内より破砕された土器群が石製模造品と多量の臼玉を伴って出土している。概要は後述するが、検出されたN-２地点は竪穴住居がみられない箇所に当たり、非常に象徴的である。

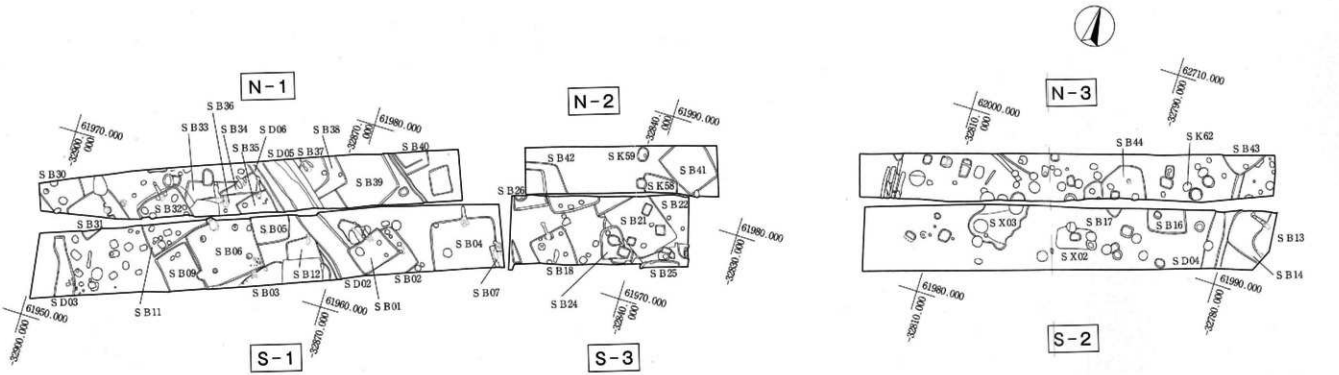


図172　Ⅶ区1次面・2次面遺構分布図（S＝1/400）

写真149　N-１地点ＳＢ33・34・35・36

写真150　N-１地点ＳＢ34・35

写真151　N-１地点ＳＢ37・38

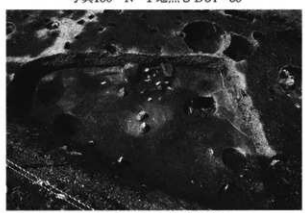


写真152　N-１地点ＳＢ32

写真153　S-１地点ＳＢ01

写真154　S-１地点ＳＢ06

写真155　S-１地点ＳＢ03

写真156　S-３地点ＳＢ18

地点名	遺構名	時代	重複関係 先	重複関係 後	床面	柱穴	付属施設	特記事項	備考	遺構図版番号	土器図版番号	写真番号
N-1	SB31	平安	SB30		貼床	なし	カマド（東壁）	S-1地点SB10は同一遺構	東側にも先行遺構（住居跡か管玉出土）あり	173	187	
S-1	SD03	古墳						N区では検出されず(SB30により破壊)	覆土中層より土器出土	173	193	
S-1	SK15	古墳				明確に確認されず		周辺の土坑とともに掘立柱建物を構成すると考えられるが、明確なプランの把握はできず		173	190	
N-1	SB32	奈良			貼床	3	カマド（北壁）	S-1地点SB11と同一遺構 臼玉1点出土	攪乱に接する部分は直下で壁を確認	174	187	152
N-1	SB33	古墳		SB32・34 SB36 SK52	硬化面	なし		臼玉1点出土	部分的検出	174	186	149
N-1	SB34	古墳	SB33	SB35・36 SD06	硬化面	未検出	カマド（北壁） 石製支脚	SB36との重複上層より臼玉・ガラス玉出土		174	188	149 150
N-1	SB35	古墳	SB34・36	SD06	貼床	1	カマド（北壁） 高杯が支脚上に正立	臼玉1点出土	カマド前面に被熱した石材や土器片を含む焼土・炭の二次堆積が検出	174	189	149 150
N-1	SB36	古墳	SB33・34	SB35 SD06	硬化面	なし	カマド（北壁）	臼玉1点出土	西側は攪乱により破壊	174	187	149
N-1	SD06	奈良か	SB34・35						S-1地点では検出されず	174	194	
N-1	SK51	古墳								174	190	
N-1	SK52	古墳	SB33							174	190	
S-1	SB09	古墳		SB06	脆弱	1			攪乱により明確には検出されず	174	183	
S-1	SB06	平安	SB3・5・9 SB35・36		貼床	4	カマド（北壁）	耳環・臼玉出土	南東壁際にコモデ石状の石材が多量に散乱	174	182	154
S-1	SB05	古墳～奈良		SB06	貼床	なし	床面上に焼土	臼玉出土	貼床の範囲や柱穴の検出状況からはSB35とは別遺構判断される。	174 175	182	
S-1	SB03	古墳		SB06	硬化面	なし	カマド（北壁）	床面上より炭化材・焼土・炭を検出	煙道はSB06下で検出	174	183	155
N-1	SB37	古墳	(SB38)	SD05	貼床	1	カマド（北壁） 支脚	石製模造品（勾玉）1・勾玉1・臼玉5出土		175	188	151
N-1	SB38	古墳	SB39	SD05 (SB37)	硬化面	なし		石製模造品（剣形）1・臼玉3出土	床面レベル・遺物相ともにSB37と同一で、同一住居の可能性が高い	175	190	151
N-1	SB39	古墳		SB38	硬化面	3	炉（2次面で確認）	石製模造品（剣形）2・管玉1・臼玉29出土		175	190	
N-1	SB40	古墳		SD07	貼床	未検出	東壁際から中央部に炭分布	臼玉6点出土	古墳（後期）土器はSD07に帰属する可能性が高い	175	190	
N-1	SD05	奈良	SB37・38					棗玉・臼玉出土 S-1地点SD02と同一遺構	古墳時代遺物はSB37・38に帰属する可能性が高い	175	193	
S-1	SD02	奈良	SB02	SB01	平坦			土玉出土 N-1区SD05と同一遺構		175	193 213	
S-1	SB12	古墳	SB08	SD02	軟弱	なし	北壁に焼土 （カマド残欠か）	土器は焼土周辺より出土		175	184	
S-1	SB01	奈良	SB02 SD02		硬化面	2（不明瞭）	カマド（北壁）	煙道西側に別の煙道があり、カマド脇の凹を考慮するとカマド作り替えの可能性が想定される		175	182	153
S-1	SB02	古墳		SB01 SD02	貼床	未検出	東壁側で焼土検出 （カマド残穴か）			175	182	
S-1	Pit05	古墳								175	194	

地点名	遺構名	時代	重複関係			床面		付属施設	特記事項	備考	遺物図版番号	土層図版番号	写真図版
			先		後	有/無							
S-1	SB04	古墳			SB07 SK01	貼床		カマド（北壁） 右袖先端に敷を連結に埋設			176	183	
						なし							
S-1	SB07	古墳		SB04		貼床		カマドのみ確認	トレンチによる確認の結果、カマドが潰れたものと判断されたが、構造は把握できなかった		176	183	
						なし							
N-2	SB42	不明				貼床			臼玉４点出土	出土遺物には古墳時代と平安時代が混在する	176	187	
						なし							
S-3	SB26	不明			SB42	貼床状の硬化面				S-2地点で検出されず、住居跡の可能性低い	176	185	
						なし							
S-3	SB18	奈良				硬化面		カマド（北壁）	鋼滓・管玉出土		176	186	156
						4							
S-3	SB19	不明				貼床			臼玉出土	N-2地点で検出されず、住居跡の可能性低い	176		
						2（不明瞭）							
S-3	SK34	奈良									176	190	
N-2	SB41	古墳			SB45	貼床			臼玉出土	住居跡である積極的根拠なし 小型丸底土器はSK58からの混入	177	187	
						なし							
N-2	SK58	古墳			SB41	平坦・地固			多量の土器・玉・石製模造品・鉄製品が出土		177 181	191 192	162 163 164
						なし							
N-2	SK59	古墳									177	192	
S-3	SB22	古墳か			SB21	貼床			SB21以東が黒色土に覆われ、ガラス玉等の遺物が出土したため、住居番号を付して調査したが、明確な根拠は得られなかった		177	185	
						なし							
S-3	SB21	不明				硬化面			臼玉・ガラス玉・鉄鏃出土	硬化面の広がりでプランを想定	177		
						なし							
S-3	SB24	古墳	SB20・21		SX04 SK32	貼床			覆土上層より臼玉・管玉が土器とともに出土	住居ではなく、土坑	177	185	
						なし							
S-3	SB25	不明				貼床		北壁にて竈土を検出	臼玉１点出土	出土遺物は２次面SB18に帰属するか	177	185	
						未検出							
S-2	SX02	弥生～古墳			SD06・13 SK22・25	不明瞭					179	194	
N-3	SB44	古墳				貼床			臼玉出土	住居跡の可能性は低い	180	190	
						なし		床面上の竈土は２次面SB34の構築					
N-3	SD08	平安			SB43						180	194	
N-3	SK62	古墳									180	192	
S-2	SB16	古墳			SK19	貼床			石製模造品片・臼玉出土	住居跡の可能性は低く、方形土坑と考えられる	180	184	
						なし							
S-2	SB17	古墳				貼床			住居跡調査を想定して調査したが、N-2区では検出されず、不整形土坑と考えられる。		180	184	
						なし							
S-2	SD04	古墳				平坦			石製模造品（刀形）・臼玉出土	N-2区では検出されず	180	193	
S-2	SB13	古墳	SB14			貼床		カマド（北西壁）	袖壁で炭検出		180	185	
						なし							
S-2	SB14	古墳			SB13	貼床			臼玉４点ならびに鋼鉄片が覆土上層で出土		180	183	
						なし							
S-2	SX05								方形ピット群に混じって検出された浅い掘込より遺物が出土。遺構番号を付して調査を行ったが、包含層中の遺物と判断される。			194	

表17　Ⅶ区１次面主要検出遺構一覧表

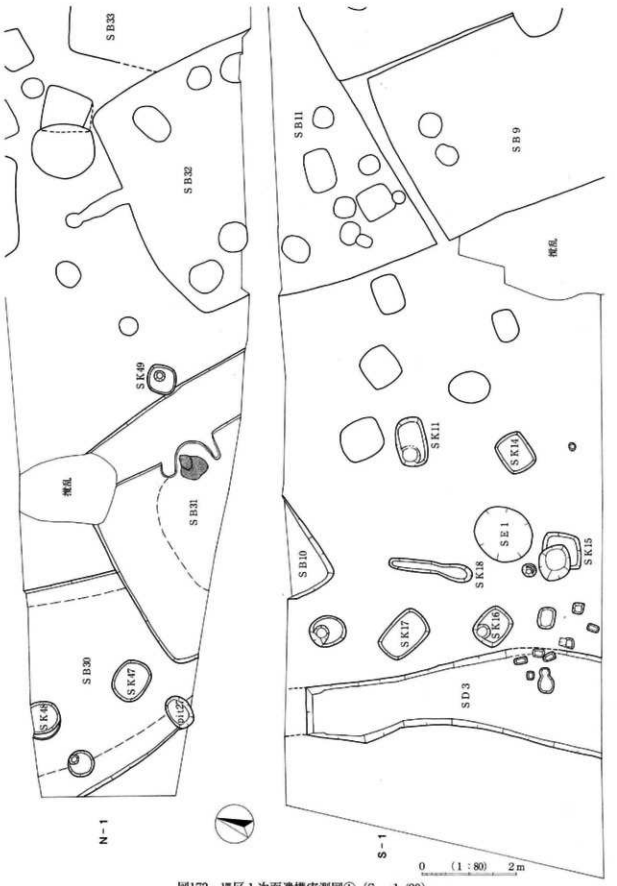


図173　Ⅶ区１次面遺構実測図①（S = 1 /80）

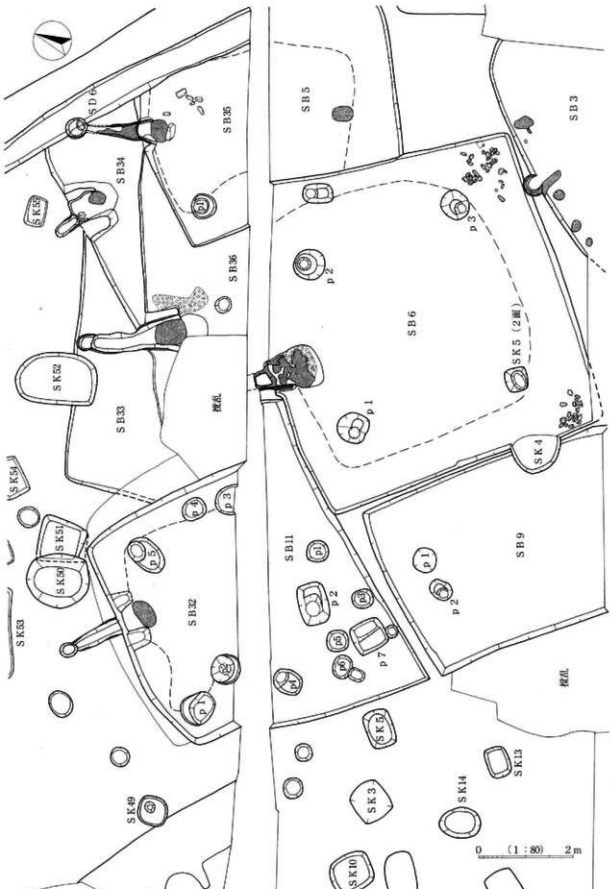


図174　Ⅶ区１次面遺構実測図②（S＝1/80）

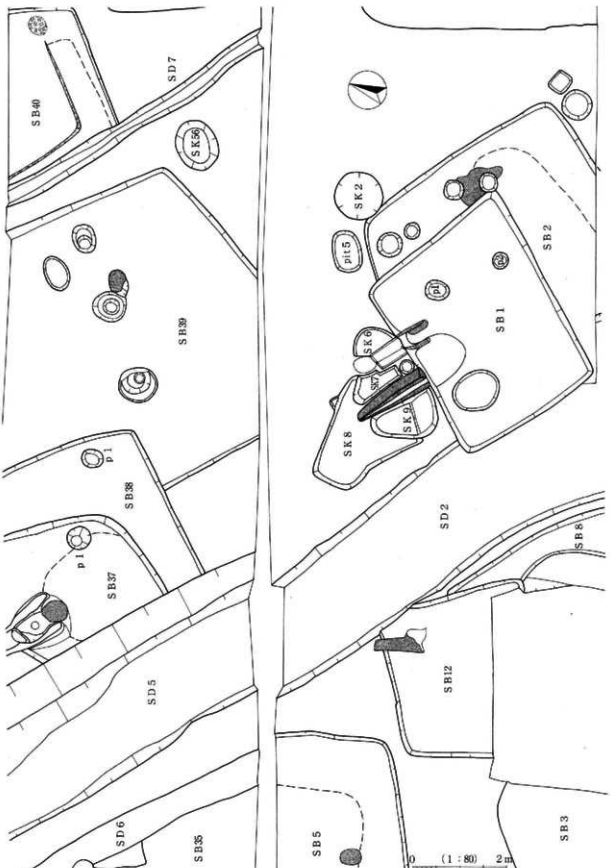


図175　Ⅶ区１次面遺構実測図③（S＝1/80）

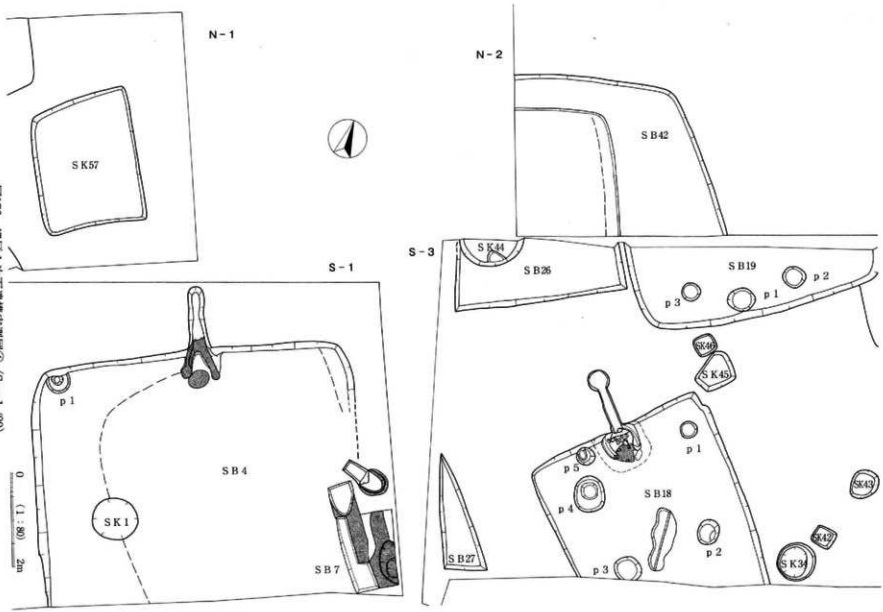


図176 WE区1次面遺構実測図① (S=1/80)

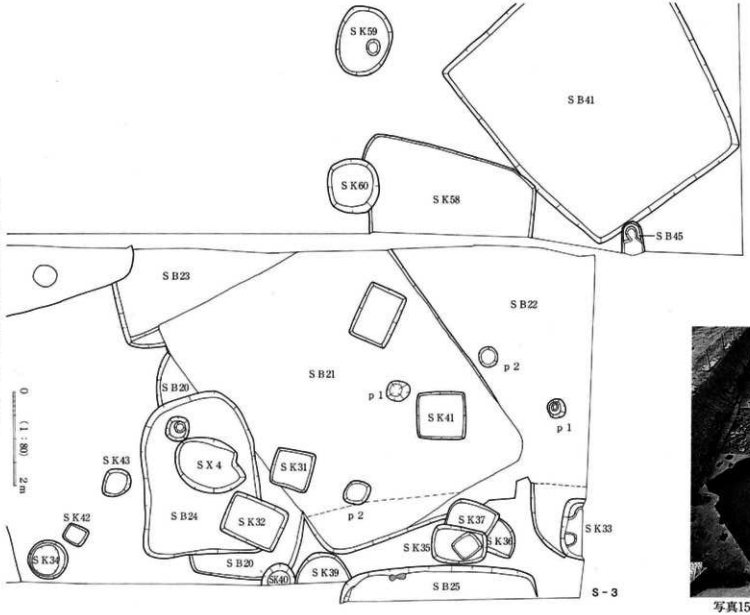


図177 Ⅶ区1次面遺構実測図⑤ (S=1/80)

写真157 N-2地点全景

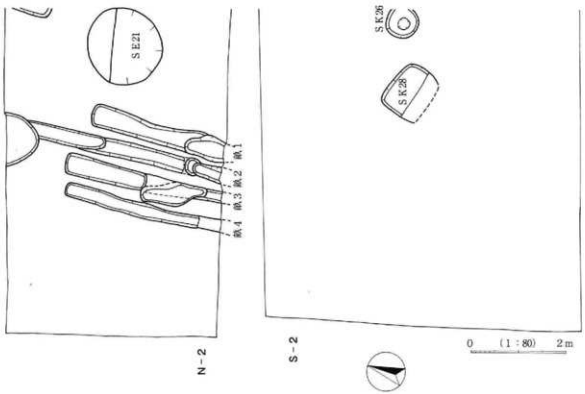


図178　Ⅶ区１次面遺構実測図⑥（S = 1 /80）

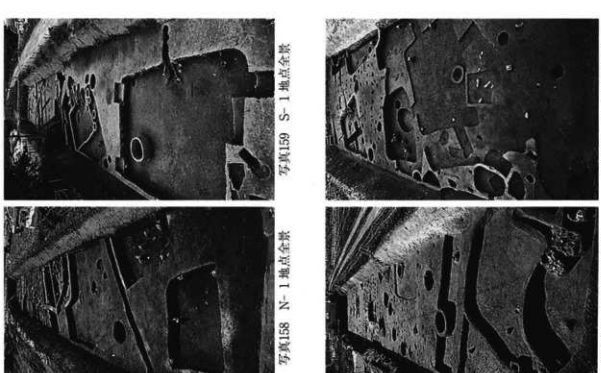


写真158　N- 1 地点全景
写真159　S- 1 地点全景
写真160　S- 2 地点全景
写真161　S- 3 地点全景

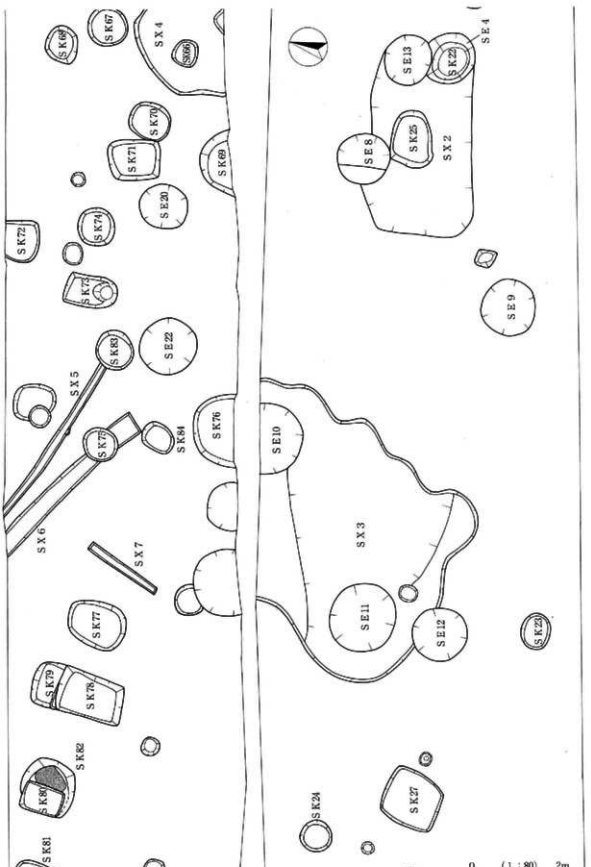


図179 Ⅶ区1次面遺構実測図⑦ (S = 1/80)